

[44] Crossover

<https://hdl.handle.net/2324/2552912>

出版情報 : Crossover. 44, pp.1-, 2019-03. Graduate School of Integrated Science for Global Society, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

CROSSOVER

No.44 March,2019



ISGS

九州大学大学院

地球社会統合科学府

Graduate School of Integrated Sciences for Global Society

「地球社会統合科学府」であること

中 野 等

(地球社会統合科学府 学府長)

2014年（平成26年）4月に開設された大学院地球社会統合科学府は2019年（平成31年）3月をもって5年目の年度を終えようとしています。地球社会統合科学府は修士課程と博士後期課程を同時にスタートさせ、前身の比較社会文化学府の修士課程を終えた学生は新設の地球社会統合科学府の博士後期課程へ進学するというかたちとなり、既に2017年（平成29年）3月に最初の博士修了生を出しています。その意味での完成年度はすでに終えてはいますが、やはり5年目が終わるというのは、大きな節目ではないでしょうか？『九州大学百年史』の編纂が終わったばかりで、次の年史で「地球社会統合科学府」の草創期が語られるのも随分先のことと予想されますので、今回は巻頭言の場を借りて「地球社会統合科学府」ができた頃の話綴ることといたします。

ご承知のように、という前振りかもしれませんが、機能しないのかもしれませんが、前身の比較社会文化学府は二つの専攻から成り立っていました。曰く「日本社会文化専攻」と「国際社会文化専攻」です。九州大学教養部が解体され新たな大学院組織として「比較社会文化研究科」（当時は現行の学府・研究院制度はありませんでした）が動き出した頃は、それぞれの専攻が実態としても意味を持っていたようですが、その後の時間的な経過のなかでたとえば教員が入れ替わると「日本」とか「国際」という看板と、中身との間に大きなズレが生じてくることになりました。

もちろん、それだけが理由ではありませんが、2011年度（平成23年度）から、従来の2専攻を改めて、専攻を1つにする方向で実際の作業が開始されることとなります。結果的には学府自体の改組という「^{おおごと}大事」となっていくわけですが、事の発端は専攻をひとつにまとめるということから始まった訳です。専攻のあるべき姿について多様な議論がなされることとなりますが、ここで専攻名についても様々な案が出されています。提案された候補のなかから、いくつかを紹介すると、「ダイバーシティ専攻」「統合ダイバーシティ専攻」「統合文化科学専攻」「博物人間科学科学専攻」「学際科学専攻」「地球市民教養専攻」などなどです。

ここで、そもそもの前身たる「比較社会文化研究科」「比較社会文化学府」の由来についても述べておきます。

1980年代の後半（昭和60年代前半）には教養部の将来構想として「教養学部」の設置が議論されていました。同じ頃、別の動きとして九大の文系学部では教養部の一部を加えた文系学際大学院（仮称「総合社会科学研究科」）構想の検討がはじまっています。その後、文系学際大学院の仮称は「比較社会文化研究科」と改められ、一方教養部の将来構想のほうは大学院重点化の流れの中で、新学部の設置ではなく独立大学院の設置へと大転換していきます。こうした動きに、当時の文部省の意向があいまって、学内では文系学際大学院構想と教養部改組問題との連動性が強く意識されることとなります。こまかなプロセスは省略しますが、結果として教養部改組の結果設置される大学院には、文系学際大学院を想定して用意されていた「比較社会文化研究科」なる名称が用いられることとなります。文理融合の大学院とはいいつつ、その名称が多分に文系的であったのは、こうした経緯によるものでした。九州大学では2000年4月（平成12年度）から大学院組織が再編され、学府・研究院制度が起動します。従来の「比較社会文化研究科」は「比較社会文化学府」と「比較社会文化研究院」となりましたが、改組の対象となったのは、このうちの「比較社会文化学府」のほうです。

すこし脇道にそれましたが、折角専攻名を改めるなら文理融合という特徴をもっと表に出したいという流れが加速していきます。こうして、専攻名の最終候補となったのが「地球市民総合科学専攻」でした。なにやら、「宇宙戦艦ヤマト」のテーマソングがBGMに聞こえてきそうな感じですが、それはともかく、その後の部局内部の意見によって「地球市民」という表現が「地球社会」に変更され、専攻名は「地球社会総合科学専攻」となりました。だいたい現状?に近づいてきましたが、これが2012年（平成24年）6月のことです。

一方、並行する全学的なやりとりの中で、1学府1専攻で名称が一致していないのは不自然であるといった意見が出されたのですが、学府名は変えないという方向性が部局として確認され、一応は「比較社会文化学府・地球社会総合科学専攻」で落ち着くこととなります。専攻名のことばか

〇〇〇 巻頭言

り話してきましたが、このころには専攻の構成や実際のカリキュラム設計をどうするかといった、いわば本質論の詰めが急がれ、専攻名称の議論に多くの時間を割くような余裕もなくなっていくと思います。

さて、改組案が一応まとまったところで、総長に対する説明がおこなわれました。2012年7月31日のことです。私自身はその場にいませんでしたが、有川節夫総長（当時）の反応は好意的で、予定時間をこえて熱心に耳を傾けていただけだそうです。評価のポイントは現有のスタッフから新専攻を考えるのではなく、「スペクトラム」で表された理念から発想しているという点にありました。この「スペクトラム」とは、改組作業のすべてを中核となって進められていた古谷嘉章副学府長（当時）のオリジナルな原案をもとにしたもので、「大学院案内」などにも「KEYWORD スペクトラムにより表現される6つのコース」として紹介される、あれです。

一般的に改組案には高い評価が与えられたのですが、まさに「禍福は糾える縄の如し」で、この好評価が改組にさらに高いハードルを課すこととなります。すなわち、総長をはじめ大学執行部の新たな目論見は、改組を比文の一部局にとどめず、学内の他部局を巻き込んでより大きなムーブメントにできないかというものでした。こうして、このちしばらくは大学執行部と、必ずしも協力的とはいえない他部局との間で、板挟み状態が続くこととなります。

ちなみに、この総長レクの間では「このまま「比較社会文化」でいいのか?」、また「今はもう「総合」は時代遅れで、これからは「統合」だ!」といった、名辞論的な重大?発言も飛び出しています。結局、曲折を経て専攻名は「地球社会統合科学専攻」となり、さらに学府名も専攻名に合わせて変更するという事となり、ようやく「地球社会統合科学府」の登場となります。9月の将来計画委員会と教授会でこの新学府名が承認され、改組案自体も11月に開催された全学の企画専門委員会で承認され、大学全体の改組案として認知されることになりました。

もちろん、改組の作業はここで終わる訳ではなく、むしろここからが本番でした。諸々の資料づくりや文科省、大学執行部などとの折衝ごとに忙殺され、精神的にも肉体的にも消耗していく日々が続くこととなります。細かに書き綴るようなことでもありませんのでここでは割愛しますが、その道のりが決して平坦なものではなかったことはご理解いただければと思います。

いずれにしろ、こうして2014年（平成26年）4月に「地球社会統合科学府」という、当時としてはやや聞き慣れない

名称の大学院組織が開設される運びとなりました。学府長という立場から、いろいろな場所で挨拶することを求められますが、口切りは学府名の説明を自分なりの解釈でおこなうことからです。

この八文字熟語は切り方を間違えると大変なことになりますので、「地球社会統合／科学」ではなく「地球社会／統合科学」と切ってください。対象である「世界」を国境線で仕切られたものとしてではなく、あくまで「地球社会」と考え、狭い専門領域を超えた「統合科学」という立場を大切に研究し、教育する大学院です。

大体こんな感じですが、では「統合科学」とは何なのでしょう? 「総合科学」が「統合科学」に変わるきっかけは、先ほど見たとおりですが、試みに手許の国語辞典（『広辞苑』第七版）で、「総合」と「統合」を引いてみると次のようになっています。「総合」は「個々別々のものを一つにあわせまとめること」で、「統合」は「二つ以上のものを一つに統べること。統一。」とあって、あまり大きな差異があるとはいえません。とはいえ、「統合」のほうがより積極的な意味合いを持つように感じられます。「総合」はまとめればそれでいいような感じですが、「統合」はまとめたものを更に別の（より高みにある別な）何かに昇華させることを求めているようにも読めます。

芥川龍之介は『鼻』のなかで、弟子の施術によって鼻が短くなった後、おそろおそろ鏡をのぞき込んだ主人公禅智内供の様子を次のように描いています。

鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、満足そうに眼をしばたいた。

芥川一流の筆致で、鏡の中の内供が実際の内供の様子を見ていることになっています。明らかな倒置ですが、東アジアでは古来「鏡」をあるべき規範の比喩として用いてきました。そこから「鏡」あるいは「鑑」は歴史を意味する概念にもなっていきます。それはともかくとして、また『鼻』のエピソードがここにふさわしいかどうか別として、概念を説明するために付与させた言語・名辞が、逆に概念自体を拘束し、規制するということはよくあることではないでしょうか? 期せずして「統合科学」を学府名に採用したわけですが、つぎは「統合科学」の名に恥じない実態をつくっていく・・・つぎの五年間は真の意味で「地球社会的視野に立つ統合的学際性」の実現にあてていくべきなのかもしれません。

ことばの意味を捉える

内 田 諭

(言語文化研究院)

(言語・メディア・コミュニケーションコース)

中学校で英語を教科として学び始めてから、机の上には常に英語の辞書がありました。わからない単語があれば辞書を引いて意味を調べる、というのが普通の使い方だと思いますが、「辞書を読む」あるいは「読み比べる」という行為もなかなか楽しいものです。英語の単語は本当に日本語の単語と対応しているのか、なぜ一つの単語にたくさんの訳(語義)があるのか、辞書によって訳語が異なるのはなぜか、英英辞書の定義は見出し語の意味を適切に伝えているのか、などを考え出すと夜も眠れなくなります(授業中に辞書を「枕」にする人もいますが言語道断です)。

「ことば」の意味に関心があったので、大学・大学院と英語学(言語学)を学び、その研究を続けたいと思って大学教員の道を選びました。2014年度から言語文化研究院に在籍し、2017年度の後期から、地球社会統合科学府の授業も担当させて頂いています。

私の専門は、一言で言うと英語の言語学(英語学)ということになりますが、その中でも特に認知意味論(さらにその中でもフレーム意味論)と呼ばれる分野に関心を持っています。この分野ではことばは「人間の世界の認知の仕方」(人間の持っている概念や世界観)を反映していると仮定します。逆に言うと、ことばを観察することで人間の概念構造を明らかにすることができます、ということになります。「世界の区切り方」は言語に相対的で、つまり、英語と日本語ではそれが異なります。ですので、英語の辞書の訳語に複数の日本語が挙げられていることは全くもって自然なことで、一対一に対応しているほうが珍しいと言えます。良い例かわかりませんが、釣りが好きですので(九大に勤務してすぐに福岡らしい(?)ことをしようと思い、船舶免許を取りました)、魚の話で一つ具体例を示します。日本人は(特に釣り人は)「ヒラメ」と「カレイ」を日常レベルで区別します。一方、英語では日常語ではflatfish (flounder) という単語があるだけで、ヒラメとカレイの違いはあまり意識されません(舌平目(sole)はフランス料理ではちょっと特殊なステータスがあるようです)。ものや出来事の「ラベル」の付け方の違いは、世界の捉え方や文化の違いを表していると言えそうです。「ヒラメ」と「カレイ」の例では海産物をよく食す日本の文化とも関連しているかもしれません。ヒラメはお刺身に、カレイは煮付けにするのが最適です(カ

レイは砂浜で釣れますが、ヒラメはなかなか釣れません)。このようにことばの裏には「訳語」以上の意味や文化があり、それを正確に、またわかりやすく捉えるのが言語学の一つの醍醐味ではないかと思います。

ことばそのものの研究に加えて、その研究の成果を言語教育などに活かす「応用言語学」も私の関心の一つです。辞書や教科書などが主な応用先ですが、机の上の(あるいはコンピューター上の)ことばの研究だけに留まらず、研究成果を世間に広く還元していければと思っています。

最近では異分野融合研究にも関心を持って取り組んでいます。人間の活動の多くは言語によって支えられていますので、言語学の応用の可能性は高く、他の分野との融合を考えるといろいろと新しいことができるのではないかと考えています。学際的な研究は地球社会統合科学府の風土とぴったり合いますので(4月から兼任させて頂いている共創学部も然りです)、先生方・学生たちと一緒に研究できることが非常に楽しみです。一方、異分野融合研究の難しさも実感しているところです。分野間の常識や文化の違い、前提の違い、手法の違い、ゴールの設定の難しさなど、チャレンジはたくさんあります。異分野融合研究は学問の「掛け算」だと感じていますが、両方の分野の知識が1人前でないと(つまり1以下だと)、中途半端な研究になってしまうかもしれませんので、積極的に言語学と掛け合わせる学問の知識や手法を吸収していきたいと考えています。勉強不足故、苦勞も多くなりそうですが、その先には新しい地平が広がっていると信じています。



はじめて自分の名前が「載った」辞書

東アジア先進大都市における 「サービスハブ」への着目

ヒェラルド・コルナトウスキ

(地球社会統合科学府・包括的アジア・日本研究コース)

(比較社会文化研究院)

2018年4月より、比較社会文化研究院に着任したヒェラルド・コルナトウスキ (Geerhardt Kornatowski) と申します。これからよろしくお願いいたします。ベリンゲンというベルギーの炭鉱町で生まれ、もともと移民労働者が多く住んでいたため、多文化的な環境で育ちました。その影響か、小さい頃から外国語や共存社会の在り方に強い関心を待っており、ベルギーのルーヴェンカトリック大学に入学した時は、比較的マイナーな学問である日本学を選びました。3年生になってから、2週間のホームステイで初めての日本へ。その場所はハッセルトの姉妹都市である兵庫県伊丹市でした。阪急電鉄によって開発された郊外住宅地と、そのターミナルである大阪市の梅田に憧れ、日本社会は非常に平和かつ現代的だと思っていた。どうしてもこの街に戻りたいと思い、その翌年1年間関西大学へ留学しました。その時、初めて大阪の「ミナミ」というエリアへ足を運び、日本最大の寄せ場と呼ばれる西成区のあいりん地域までも散策して、とにかく最初持っていた日本社会のイメージとのコントラストが非常に印象的でした。おそらく、その時初めて都市社会の空間性に興味を持ち、ベルギーで卒業してから再度日本へ行き、2004年より大阪市立大学大学院に入学し、人文地理学を専門にしました。

幸運にも、修士課程に入ってから、指導教員の水内俊雄教授の基盤研究プロジェクトに参加させていただき、当時東アジア各地で社会問題として認識されるようになったホームレスに対する支援制度の比較研究に着手しました。どこへ行っても、大阪のあいりん地域のように、日払いの賃貸住宅や日雇い労働が集中しているインナーシティ地域が何らかの形で存在していることに着目し、こうした地域を支援拠点にしているボランティアセクターによるホームレス支援の発展過程を修士論文でまとめました。

そして、同大学の博士課程に進学し、香港の事例に絞り、より詳細なアプローチをかけることにしました。博士論文のテーマとしては、サービス・不動産・金融業を経済的基盤に転換した香港の都市空間構造の変容から総括的に広義のホームレス問題を分析し、とりわけ、住宅市場の変動過程、地域社会の変容と、そしてそれに伴うボランティアセクターと行政とのパートナーシップに

よる新たな福祉的ガバナンスに焦点を当てました。

博士号を取得したあと、特任教員としてとして大阪市立大学都市研究プラザに着任し、積極的に理論研究に取り組み、香港とシンガポールにおける社会的排除問題の研究に着手しました。とりわけ、両都市が世界先進地域の中で最も激しい格差社会を抱えているコンテキストでは、生活困難者支援の在り方をいかに捉えるべきか、適切な住宅資源の確保にいかに取り組むべきか、このような問題意識を持ち、両都市における今後の生活困難者向け支援の在り方を考察するようになりました。



より理論的な研究に専念した結果、現在は、「サービスハブ Service Hub」概念の観点から、シンガポールにおける外国人労働者問題と香港・マカオにおける生活困難者問題をめぐるアーバンガバナンスについて追究しています。サービスハブとは、先述した生活困窮者に対する (NPOなどによる) 支援拠点が集中しているインナーシティ地域のことを指しており、その包摂的なポテンシャルを検討しています。とりわけ、欧米先進国のように福祉国家の背景を持っていない香港とシンガポールでは、こうした地域が今後どのような都市空間的な受け入れ機能を果たし、またローカルな (社会的) 資源を活用することにより、人を都市社会へ包摂させる支援及び、人が自分を包摂していく非支援的な動き、この二つの観点から考察を行っているところです。

上述した社会的問題意識から「都市空間と社会」という個人ゼミを担当しています。教育アプローチとしては、受講生に都市社会の基本的な理解を深めてもらい、現代世界と特にアジアにおける国際化や移民問題、少子高齢化、過疎化とコミュニティ課題というさまざまな問題について、「現代地域」をキーワードに、思考力・判断力が身につくように進めています。実際にこうした諸課題に馴染んでもらうために、フィールドワークも実施しています。このように、実際にフィールドに出て、世界の良い部分も悪い部分も知るチャンスが得られます。ご関心のある方ぜひともご参加ください。お待ちしております！

小さなハチの研究を通して学んだことを伝えたい

井手 竜 也

(地球社会統合科学府)

今年度から包括的生物環境科学コースのスタッフとなりました。国立科学博物館動物研究部の井手竜也です。国立科学博物館は九州大学を始めとする大学と連携し、次世代の研究者の育成に取り組んでいます。この度、九州大学との連携大学院にて昨年度まで指導に当たってきた、小野展嗣先生が退官されたことを受けて、後任としてスタッフに加わることになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

地球社会統合科学府の前身である比較社会文化学府で、学生時代(修士課程および博士後期課程)を過ごさせていただきました。学位論文の研究対象は、タマバチというハチのグループです。タマバチは、植物に寄生し、その寄生部分に虫こぶ(またはゴール、虫えいともよばれるもの)を形成して、幼虫の餌や住処として利用するという生態を持つことが特徴です。その多くの種は、ブナ科の主にコナラ属に寄生するナラタマバチ族というグループに属しています。コナラ属以外に寄生する本族の種としては、クリの重要害虫として知られるクリタマバチが有名です。

修士課程の研究を開始した当初、アジアのタマバチの多様性の解明は、同じくタマバチが分布しているヨーロッパや北アメリカに比べて、著しく遅れていました。当時、コナラ属はおもに落葉性のコナラ亜属(クスギやコナラの仲間)と常緑性のアカガシ亜属(カシの仲間)に大別されていました。アカガシ亜属はアジアに固有であり、これを寄主とするタマバチがいるかないかで、アジアにおけるタマバチの潜在的多様性の評価は一変します。ところが、ナラタマバチ族の既知種は、上記のクリタマバチを除き、コナラ亜属を寄主とするものだけが知られている状況でした。

一方で、日本国内において、アカガシ亜属から、タマバチの未記載種によって形成されたと思われる虫こぶが複数報告されていました。そこで、このアカガシ亜属の虫こぶとその形成者について重点的な調査をおこなったところ、九州大学伊都キャンパスの生物多様性保全ゾーン内のアラカシにて、未記載種のタマバチが発生していることを突き止めることができました。



伊都キャンパスで発見されたマスタアラカシタマバチとその虫こぶ(カシメフクレタマフシ)

この研究成果はアメリカ昆虫学会が刊行している国際学術雑誌にて発表されました。これを契機に、海外の研究者によっても、中国や台湾から、アカガシ亜属を寄主とするナラタマバチ族が報告されており、アジアのタマバチ相解明の呼び水として、この研究が役に立ったのではないかと考えています。

国内のナラタマバチ族の既知種全種を扱った分類学的研究を博士論文にまとめながら、DNAに基づいた系統解析や種同定(DNAバーコーディング)の基礎技術も身につけました。これを生かして、独立行政法人森林総合研究所(現国立研究開発法人森林研究・整備機構)にポスドクとして着任し、外来昆虫侵入の水際対策に関する研究に3年間従事しました。

この間、外来種対策の先進国であるオーストラリアやニュージーランドに訪問し、現地の研究者とモニタリングトラップの開発にかかわる国際共同研究や現地の学会での発表なども経験しました。また、LAMP法と呼ばれる手法を利用した微小な外来昆虫の同定手法を開発した研究成果は、近年話題となっているヒアリの水際対策にも貢献しています。

2017年4月より現在の国立科学博物館に入りました。現在は、博物館にて研究成果を一般の方々に向けて発信できるよう、より広くハチやその他の昆虫について学びつつ、研究に取り組んでいます。まだまだ研究者としては若輩ですが、これまでの経験で学んだことを、大学院生のみなさんにお伝えしていくことができればよいなと思っています。

学校と子ども、保護者をめぐる 多文化・多様性理解ハンドブック

松 永 典 子

(地球社会統合科学府)

本書は比較社会文化研究院の院長裁量経費プロジェクトより助成を受けた研究プロジェクトの成果の一環として、2018年3月に金木犀舎より刊行されたものである。採択課題は「多様性共存に関する統合学際型日本研究」(平成28年度)および「多様性共存に関する統合学際的研究—学校における多文化理解教育の推進に向けて」(平成29年度)である。

構成は【読み物編】と【資料編】の2部構成で、【読み物編】は第1章から第4章の4章構成、【資料編】は外国につながる児童生徒受け入れのためのマニュアルと、役に立つリンク集の2つから構成されている。内容は、外国につながる児童生徒と日本語指導の現状、日本の学校文化の特異性、文学作品からみる多様性理解など、多文化・多様性についての理解を深め、学校現場での対応に役立つ情報をまとめたものである。ある日学校に外国につながる子どもがやってきたら手続きは何からすればよいのか、文化理解にはどういった心得が必要なのか、コミュニケーションにはどういったコツがあるのか、といった課題に対して基本的な知識と情報を詰め込んでいる。

執筆には、本プロジェクトの代表者である松永(多文化共生教育論)、プロジェクトメンバーである比較社会文化研究院の施光恒准教授(政治理論)、波瀾剛教授(近現代文学)のほか、久留米大学のS.M.D.T. ランプクピティヤ講師(スリランカ出身・比文学府修了生)が外国人保護者・研究者としての立場から加わり、資料編の作成にはプロジェクトに関わった博士後期課程の大学院生趙一嶸氏(中国)、金元正氏(韓国)も協力している。まさに多文化・多様性理解を語るにふさわしいメンバーが集結して取り組んだ研究成果の発信である。

本書を編纂した目的の第一は、学校現場の先生方に直接役に立つ情報を提供し、保護者の方々にも外国につながる人々の思いをコンパクトにまとめて伝えられたらということにある。なぜならば、執筆者メンバーは、人権教育や日本語教育、多文化理解教育といった分野で児童生徒の教育に関わる研究をしているというのみならず、外国籍の保護者であったり、国際結婚家庭の保護者であったり、それぞれの観点や立場で学校教育に関わっているということがある。

また、そういった学校の中の多様化は、同時に地域社会で暮らしていく人々が多様化していくということでもある。本書の目的の第二は、地域における多文化理解・相互理解を進めていくための参考になる情報を提供するということである。そのため、多文化を理解するための視点や方法論について、政治学、文学、日本語教育、異文化コミュニケーションといった各々の分野から切り込みはしているものの、研究からはやや離れた自由な語り口、わかりやすい文体で書くことにより一般の方々へも提供したいと考えた。

本書を刊行するに至ったのには、比較社会文化研究院社会連携事業として2012年度より取り組んできた「地域社会における日本語教育と多文化理解教育に関する社会連携事業」としての活動がベースにある。本事業では、留学生や留学生の家族等、「生活者としての外国人」の地域社会に対する意識調査を皮切りに、留学生の家族対象の日本語クラスの開講、小中学校への学生サポーター・通訳の派遣、学校文書の翻訳活動等を行ってきた。本事業を通して、学習や交流を軸に地域社会との接点を求める留学生へ活動の機会を提供するとともに、留学生が地域社会の中で自ら率先して動き、社会を支えるメンバーとして活躍できる存在であることを証明してきた。

本書が刊行された2018年は、はからずも日本語教育においても多文化共生教育においても激動と言える年であった。2018年6月の経済財政運営の基本方針(骨太の方針)では、人手不足を背景に外国人材の受け入れ拡大が示され、これに伴い日本語教育政策の骨子案も策定された。つまり、国は、地域や職場で確実に増えていく外国人を支援する方向へと大きく舵をきっていつている。今後ますます、多文化化が進む社会の中で異質なものにどう向き合い対処していくかは、一部の関係者のみならず、私たちの日常に密接に関わる現実となった。こうした時代の転換点の中で生まれた本書が多文化・多様性理解の一助となることを願ってやまない。



「高度グローバル人材養成プロジェクト」 最終評価国際委員会 公開シンポジウム「統合的学際研究の新たな展開」

グローバル化プロジェクト推進室



GRADUATE SCHOOL OF
INTEGRATED SCIENCES
FOR GLOBAL SOCIETY



FACULTY OF
SOCIAL AND CULTURAL STUDIES



KYUSHU
UNIVERSITY

New Developments in Integrated Interdisciplinary Research

平成26年4月、新たに発足した九州大学大学院地球社会統合科学府は、各学術分野固有の専門性を高度に考究すると同時に、学際的視野を大きく拡充して「地球社会」的規模で諸問題の本質を把握し、文理の枠を超えた「統合的な学際性」に立脚した課題解決能力を涵養できる人材を育て、高度専門知識を有する職業人や世界レベルの研究者を輩出することを目的としている。このような教育の国際化及び学際教育の高度化といった課題の実現のため、平成26年度「高度グローバル人材養成プロジェクト」を開設した。本年度は5年間にわたる本プロジェクトの最終年度にあたり、国際的かつ高水準の評価委員会を組織し、プロジェクトの成果について厳密な検証をうけるための「最終評価国際委員会」を開催した。あわせて公開シンポジウム「統合的学際研究の新たな展開」を開催した。

【実施主体】九州大学大学院比較社会文化研究院
(地球社会統合科学府)

【事業期間】平成26年度～平成30年度(5年)

【事業概要】「本プロジェクトでは、海外研究者チームの長期招聘等による統合的学際教育・高度専門教育を推進するとともに実践的外国語トレーニング・海外フィールドワークを実施し、研ぎ澄まされた国際感覚を涵養する。これらにより、国際水準の「教育グローバルネットワーク」を構築し、「高度グローバル人材」養成をダイナミックに推進して社会の要請に応える。」

1. 最終評価国際委員会

日時：2018年12月8日(土) 10:00～12:00

場所：九州大学伊都キャンパス

日本ジョナサン・KS・チョイ文化館(中山ホール)

趣旨：本プロジェクトの成果を点検・評価し、成果にもとづく今後の事業を構想する

国際評価委員（敬称略）：

- ・ Simon Harley (Professor, School of Geo Sciences, The University of Edinburgh)
- ・ Mark Harrison (Professor, The History of Medicine, The University of Oxford)
- ・ 曹 大峰 (北京外国語大学 北京日本学研究中心 教授)
- ・ 小泉 惠英 (九州国立博物館 学芸部長)
- ・ 是澤 優 (国連ハビタット福岡本部 本部長)
- ・ 吉田 憲 (JICA 中南米部 次長)
- ・ 荒殿 誠 (九州大学 理事・副学長)
- ・ 丸野 俊一 (九州大学 理事・副学長)
- ・ 若山 正人 (九州大学 理事・副学長)
- ・ 中野 等 (九州大学 大学院地球社会統合科学府長／比較社会文化研究院長／プロジェクト統括長)

プログラム：

司会：大野 正夫 教授

- 10:00～10:05 開会、評価委員紹介
- 10:05～10:10 学府長挨拶 (中野 等 研究院長)
- 10:10～10:30 概要説明 (三隅 一百 教授)
- 10:30～11:20 中間評価以後の活動実績
- ・ グローバルネットワークチーム
(マシュー・オーガスティン 准教授)
- ・ 教育国際化チーム (菅 浩伸 教授)
- ・ 学際教育開発チーム (施 光恒 准教授)
- ・ 推進室・広報チーム (アンドリュー・ホール 准教授)
- ・ 今後の事業構想 (松井 康浩 教授)
- 11:20～11:50 質疑応答
- 11:50～11:55 総括 (中野 等 プロジェクト統括長)
- 11:55～12:00 閉会

2. 公開シンポジウム「統合的学際研究の新たな展開」

日時：2018年12月8日（土） 12:30～16:50

場所：日本ジョナサン・KS・チョイ文化館／伊都ゲストハウス
(ポスターセッション)

プログラム：

- ・ 学府生等によるポスターセッション (12:30～13:20)
発表者：33名 (表1を参照)
 - ・ ミニシンポジウム1：「統合的学際研究としての医療史」
(13:30～15:00) 【使用言語：英語】
- コーディネーター・司会：鬼丸 武士 (九州大学 准教授)
- 1 Colonial Medicine and its Legacy for 'Independent' Korea
金 貞蘭 (オックスフォード大学 研究員)

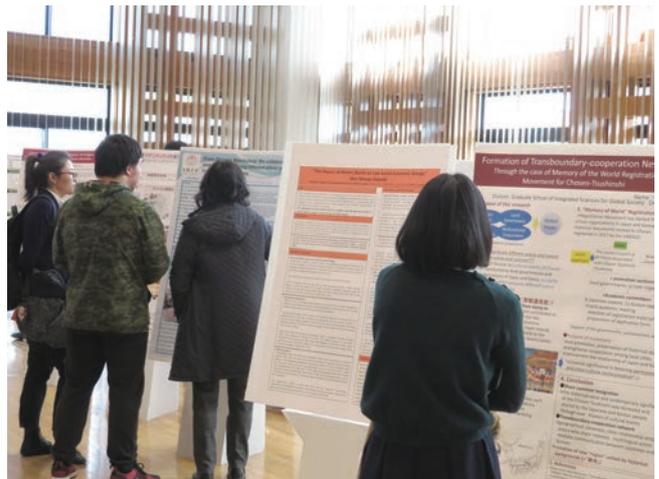
- 2 A History of Japanese Tropical Medicine in the 20th Century and its Contribution to the Global Health in the 21st Century

飯島 渉 (青山学院大学 教授)

ミニシンポジウム2：「浅海底の精密地図作成から発展する学際研究」 (15:20～16:50) 【使用言語：日本語】

コーディネーター・司会：菅 浩伸 (九州大学 教授)

- 1 高解像度海底地形図の作成とそれを基にした学際研究の枠組み
菅 浩伸 (九州大学 教授)
- 2 サンゴ礁浅海底における地形学と地質学の融合：気候変動と地殻変動の影響を受けたサンゴ礁システムの統合理解に向けて
藤田 和彦 (琉球大学 教授)
- 3 水中考古学と地形学の融合：フォトグラメトリーを使った浅海底の記録
山船 晃太郎 (Texas A&M University 研究員)



学府生等によるポスター発表の様子



公開シンポジウムの様子

○○○ プロジェクトレポート

プロジェクト成果物一覧

＜報告書等＞

- ・『東アジア地域協力・地域秩序の未来』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.01 (2014)
- ・『人類紀統合科学』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.02 (2015)
- ・『語用論と言語教育』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.03 (2015)
- ・『日中の文化交流史と今後の展望』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.04 (2015)
- ・『近代東アジアにおける知の加工・移動・翻訳』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.05 (2016)
- ・『世界近現代史における占領及び植民地支配』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.06 (2016)
- ・『日本における市民活動と参加』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.07 (2016)
- ・『研究方法論』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.08 (2016)
- ・『植民地における医学史』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.09 (2017)

- ・『タイおよび東南アジアの地質、鉱物資源およびテクトニクス』海外研究者チーム招へい事業報告書 Vol.10 (2017)
- ・『九州大学大学院地球社会統合科学府三周年記念国際シンポジウム アジアを捉えなおすー歴史、文化、秩序ー 要旨集』(関連著書刊行予定)
- ・『明治維新150周年記念国際シンポジウム 九州から見た明治維新とアジアの近代化 要旨集』(関連著書刊行予定)
- ・『「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」最終評価報告書』

＜関連著書＞

- ・"Translation, Transculturation, and Transformation of Modernity in East Asia". Ewha Institute for Humanities, Ewha Womans University & Graduate School of Integrated Sciences for Global Society, Kyushu University, Somyong Publishing, Korea, 2018
- ・"Global Social Archaeologies: Making a Difference in a World of Strangers, 1st Edition". Claire E Smith, Koji Mizoguchi, Routledge, London, 2019.

＜プロジェクトホームページ＞

URL : <http://isgs.kyushu-u.ac.jp/Project/index.php>

表1 学府生等によるポスターセッション発表者リスト

No.	氏名	課程・学年	タイトル
1	田口 大輔	博士3年	Preimaginal stages of the egg-pupal and larval-pupal parasitoid <i>Gnatosoma micromorpha</i> (Hymenoptera: Figitidae: Eucolilinae)
2	CHEN Jinyan	博士1年	Language Strategies of English Learners in Parliamentary Debate : A Case Study of Native Japanese Speakers in English Debate Tournaments
3	林 旭佳	修了生	Distribution of the dealer and repair parts management system of a Japanese multinational car manufacturer in China : A case study of GAC Toyota Motors
4	高瀬 正暁	修士1年	
5	張 耀丹	博士1年	The motivations, preferences, and residence purchasing patterns of Chinese in Tokyo Metropolitan Area
6	湯 天悦	修士2年	The acceptance of kimono in China through the Internet and relationship between cyberspace and real space : focusing on activities of Shanghai Kimono club
7	村岡 敬明	博士2年	沖縄県読谷村教育委員会との社会連携プロジェクト～戦後沖縄史デジタルアーカイブ化の取り組み～
8	Yirong ZHAO (趙 一嶸)	博士3年	Using drama approach to facilitate cross-cultural communication
9	Jieun Ahn (安 芝恩)	博士2年	Communication Strategies of Japanese Language Learners Living in Japan : through an Analysis of Consciousness Survey of Japanese Language Teachers
10	吉嶺 加奈子	修了生	Is it called that "e-learning is Learning Innovation" : Investigation to the researchers from AEC countries in Thailand

No.	氏名	課程・学年	タイトル
11	コルドバ・エステバン	博士1年	The Reconstruction of the Collective Memory of World War Two in Japanese Television
12	馮 荷菁	博士2年	講義の談話におけるスピーチレベル・シフトの機能
13	北原 優	修了生	東アジアにおける西暦200年から1100年の3次元考古地磁気永年変化曲線の復元
14	Bui Thi Sinh Vuong	博士2年	U-Pb detrital zircon dating of the pelitic gneisses from the Kontum Massif, Vietnam
15	Syeryekkhaan Kyndyz	修士2年	Petrology of metamorphic rocks in Gobi-Altai Mountains from Western Mongolia
16	Fransiska Ayuni Catur Wahyuandari	修士1年	Petrography and Garnet Mapping Results from Metamorphic Rocks in the Mutis Metamorphic Complex, West Timor, Indonesia
17	曹 家寧	博士3年	Social Support of New Generation Migrant Workers of China
18	張 天奇	博士3年	Queer Activism on Japanese Campuses
19	富田 健司	修士2年	From Brussels, Washington to Moscow : Nigel Farage's cross-border connections
20	山口 祐香	博士1年	Formation of Transboundary-cooperation Network : Through the Case of Memory of the World Registration Movement for Chosen-Tsushinshi
21	富田 啓貴	博士2年	Oral health reveals urban and rural differences in Western Japan during the early modern period
22	福永 将大	博士3年	Social interaction of the Late Jomon society : Through the analysis of the Late Jomon pottery excavated from the Kuginosengen site
23	ロフトス・ジェームズ James Loftus	博士1年	Conscious and Embodied Social Identities in Prehistoric Yayoi Pottery Communities
24	星野 宙也	修士1年	水稻農耕定着期における集団関係変化プロセスの研究－関東地方を例に－
25	佐野 亘	修士1年	Reconstructing sedimentation process of fringing reef lagoon using sediment cores obtained from Kume Island.
26	田中 美保	修士1年	Seafloor topography on the fishing ground in Amami Sumiyo Bay
27	里村 和歌子	修了生	「主婦」にとっての自立とは何か？
28	Li Rui	博士3年	Women' role changes in contemporary China
29	Hiro Mitsuo Hayashi	博士3年	Social Exclusion and Economic Development in the Context of Japanese Minority Groups : Fukushima-chō and Hiroshima City in the Post-War Period
30	邓 雁南	博士2年	From China to Manchukuo : Collaboration and resistance among different ethnic groups in the Manchukuo Army
31	北野 一平	修了生	Geological Correlation between Sri Lanka and East Antarctica
32	Tamir Battogtokh	修了生	REE Mineralization in Alkaline Plutonic Rocks from North-West Mongolia
33	三隅 一百	副学府長	NEEP : Next Enhanced Education Program (教育の質向上支援プログラム) 企画

フューチャーアジア創生を先導する 統合学際型リーダープログラム 平成29年度研究調査旅費支援制度レポート

「フューチャーアジア創生を先導する統合学際型リーダープログラム」では学府生を対象に「研究調査旅費支援制度」を設けています。平成29年度は計18名のプログラム生に対して旅費支援を行いました。以下それら活動について紹介します（カッコ内の所属・学年等は当時のもの）。

安部 陽子（言語・メディア・コミュニケーションコース
修士課程1年） 調査地：大阪

私は現在「留学生の日本企業における就職促進」をテーマに、留学生がアルバイト時に持った日本企業や日本人上司・同僚に対する違和感を調査し、これらを削減させることで、日本での就職に対して留学生が持つ不安を減少させることを目的に研究を続けています。

大学院入学前、私は民間の日本語教育機関において日本語教師として勤務していました。様々な国出身者の留学生に日本語指導行っている中で、苦勞して日本語を習得し日本文化に親しんだ多くの優秀な留学生が、日本に残りたいと就職を希望するにもかかわらず、それが叶わず帰国するケースを幾度となく見してきました。

日本は今後、少子高齢化が進み急激な人口減少と共に、大幅な労働力不足が懸念されています。そのような現状の中で、日本語と日本文化に精通し、日本企業に就職を希望する留学生は、非常に貴重な存在です。しかし実際の教育現場では、ビジネス日本語に焦点が当たりがちで、文化面からどう日本企業に適応いくかという指導は行われていません。そこで私は、大学院での研究を通して、日本企業に適応するための留学生のプログラム作成を最終目標とし、様々な方向性からの視野を広げています。

フューチャーアジアプログラムでは、アジアの問題解決を基本として、外部の先生方の授業や、学校を飛び出しフィールドに出での授業など、研究領域の分野に留まらない視野を広げる授業が、年間を通して開かれています。その授業の1つとして昨夏は、小学校で行われている日本語指導と必要とする外国人児童の夏季教室に参加し、児童たちに実際に日本語を通して国語や算数などの指導を行いました。更に、実際に児童たちに指導をしている先生たちの講義を通して、福岡市における外国人児童の現状や抱える問題点を知ることで、自身の研究における問題に対する意識も変化しました。

私は、留学生の日本企業へのスムーズな適応のためには、これまで研究を続けてきた不適応要因の特定だけでなく、その要因を適応要因に変えていく解決過程を明確化し、組織適応に必要な技能を身に付けることが必要であると思っています。私自身、プログラムを通していただいた研究費を用い、元勤務先であった大阪の日本語学校で、中国やベトナム出身の元留学生スタッフ社員にインタビュー調査を行うことで、違和感や困難点をどのように解決しているかを聞き出し、解決過程を明らかにするべく研究を進めています。そして、研究結果を社会に還元し続けることで、留学生が日本人社員と共存できる社会を目指し、今後も研究を続けていきたいと思っています。



許 思寒 (包括的生物環境コース 修士課程1年)

調査地：中国 (四川省)

私は四川省で育ちました。小さい頃から山に住み、森に遊び、森林とは深い繋がりがあります。大学の時、アウトドアスポーツに関するサークルに参加し、山に登ったり、ハイキングしたり、様々なアウトドアスポーツにチャレンジして大自然と密接に触れ合いました。学部卒業後、中国の森林公園の現状に興味を持ち、その発展に自分の力を生かしたいと考え、本学に入学を決めました。現在は中国の森林公園の管理状況について研究しています。

修士1年の後半、フューチャーアジアプログラムの存在を知り、プログラムの体験授業に参加しました。プログラムの活動内容は非常に豊富で、様々な主題をめぐり、現地での体験や、他のプログラム生とも交流しました。その過程の中で自らの専門知識だけではなく、他分野の多くの知識についても学ぶことができました。私たちは自分の目で見て、自分の足で探し、自分の頭で考えて、異なる意見も尊重しながら、真理を追求します。それは学生あるいは研究者として大切な資質であると思います。

加えてフューチャーアジアプログラムには「研究調査旅費支援制度」があります。私は幸運にも支援をいただき、今年3月に中国の二つの森林公園(剣門関森林公園と海螺溝森林公園)の現地調査に行きました。今回の調査により中国森林公園の基本的な管理の現状を知ることができました。そして、中国森林公園と中国の他の保護地域(風景名所地、自然保護区)に重なる問題も発見しました。今後はそれら地域の管理維持についても研究を続けていきたいと思っています。

斯様にフューチャーアジアプログラムには心から感謝しています。本プログラムの目標に向けてこれからも頑張りたいと思います。



飯島 力 (社会的多様性共存コース 修士課程2年)

調査地：アメリカ

私はラティーノ(ラテンアメリカ諸国にルーツをもち、アメリカ合衆国に居住する人々)の描く壁画を通じた社会運動の調査をおこなっています。具体的に、サンフランシスコ市ミッション地区のラティーノ壁画に焦点を当て、この芸術の歴史の変遷や社会的な意義の調査を現地でおこなってきました。

本プログラムでは主専攻を越えた学際的な知識を獲得する機会が与えられている一方で、「研究調査旅費支援制度」によるプログラム生の調査支援もおこなってます。私は2017年度に研究調査旅費支援制度を利用し、サンフランシスコ市ミッション地区で調査をする機会をいただきました。現地ではラティーノ芸術家へのインタビューを通じたオーラルヒストリーの収集、実際の壁画制作への参加などの調査を実施しました。この調査で得られた経験や資料をもとに、修士論文の「サンフランシスコ市ミッション地区のジェントリケーションとラティーノ壁画-This Place…とCarnavalに着目して」を執筆することができました。

今後も本プログラムで得られる経験を最大限生かし、地球社会的な視座のもと社会問題を解決に導く能力を養っていきたいと考えています。



村岡 敬明 (国際協調・安全構築コース 博士後期課程1年)

調査地：沖縄

私は、「米軍統治下の沖縄のナショナリズムと帰属意識の歴史の変遷」に関して、琉球政府・沖縄県の政治家、および教育者であった屋良朝苗(やら・ちようびょう/1902年~1997年)を祖国復帰運動の視点から研究しています。

祖国復帰運動とは、1950年代~1960年代にかけて、沖縄教職員会(現:沖縄県教職員組合)の会長であった屋良朝苗を中心とした、米軍統治の脱却と祖国日本への復帰とを訴えた沖縄全島民と一体化した運動です。しかし、屋良研究自体、今日に至るまで本格的になされた形跡がほとんど見当たらず、私の研究が初の試みと言っても過言ではないと思われます。今回の研究調

○○○ リーディングプログラムレポート

査旅費支援では、屋良朝苗の政治思想を中心に調査検討した結果、2つの成果を上げることができました。

(1) 屋良朝苗研究の初期段階の成果は、「米軍統治下の強制土地収用と沖縄住民のナショナリズムの激化——小禄村具志部落と宜野湾村伊佐浜部落を事例として——」を『日本地方政治学会・日本地域政治学会誌』に、「屋良朝苗の政治思想の形成——教員時代と行政主席選挙を通じて——」を『東アジア共同体・沖縄(琉球)研究会誌』にそれぞれ論文として公表できたことです。今後は、査読誌に研究成果を着実に公表できるように努力をしていきたいと考えています。

(2) 沖縄県読谷村教育委員会と社会連携協定を締結したことです。写真は、協定を締結するために読谷村教育委員会の松田平次教育長を表敬訪問した際の1コマです。内容は読谷村史編集室に置かれている米軍統治下の沖縄における祖国復帰運動の写真資料2万5000点のデジタルアーカイブ化することです。資金はクラウドファンディングで一般に広く賛同者を募りました。その様子は、『朝日新聞』・『沖縄タイムス』・『琉球新報』・『ハフィントンポスト日本版』などが関心を持って報道しています。

資料のデジタルアーカイブ化については、2018年10月に、読谷村史編集室の「戦後沖縄教育史・復帰関連資料」のホームページに公開する予定で進行しています。11月には、ホームページへの公開を記念して読谷村でプロジェクト報告会を実施します。なお、読谷村では「(仮称)村総合情報センター」の新設構想が進められており、完成の暁には2万5000点の資料も同センターに展示・保存されます。

私自身は、沖縄県読谷村教育委員会との社会連携を起点として、研究論文を査読誌に掲載されるように努力し、得られた研究成果は社会に還元していきたい。そうすることで、様々な分野の沖縄研究の一翼を担うことができ、更には、沖縄が抱える諸問題(基地問題など)の解決にも微力ながら貢献できるのではないかと考えております。



黄 悠然 (包括的生物環境科学コース 博士後期課程1年)
調査地: 台湾

I study the taxonomy of flies, in particular the tribe Blondeliini (Diptera : Tachinidae), specifically *Medinodexia*, a small genus comprises 4 species, which are mainly distributed in the Asia-Pacific region. *Medinodexia fulviventris* Townsend, 1927 is type species distributed in Indonesia. *Medinodexia morgani* (Hardy, 1934) had been used as a biological control agent against *Aulacophora hilaris* (Boisduval, 1835) (Coleoptera : Chrysomelidae) in Australia, and was also found in Sri Lanka. *Medinodexia exigua* Shima, 1979 and *Medinodexia orientalis* Shima, 1979 were designated as *Medinodexia* because of the piercing ovipositor borne by female flies.

However, the morphology of male and female postabdomen of *M. orinetalis* and *M. exigua* is very different from that of all other *Medinodexia*. Those two species required further studies for the taxonomic placement, so the fresh samples for molecular analysis were very important. I was able to collect them in two field trips.

My first field trip was in November 2017, when I collected 243 specimens (40.5 specimens a day on average). There were about 10 genera, which included *M. orinetalis* or *M. exigua*. The six days of the trip had good weather, that is there were no rainy or cloudy days, only sunny days with relatively high temperature. I first collected at Chun Yang, according to my plan, but it was too dry for flies. I went to Li Shing the next day and collected many flies, so I changed the collecting site to Li Shing. Most of the flies were collected from Li Shing. When I was returning to Taichung, I collected at Chien Tai forest road and caught many Blondeliini.

My second field trip was in March 2018, and I collected 302 species (about 43 specimens a day on average), which included about 10 genera, including *M. orinetalis* or *M. exigua*. The weather was also good. I collected at Chun Yang, Li Shing, Mei Feng and Tsui Feng according to my plan, but there were not many flies. As a result, I went to the Chien Tai forest road again and collected most of the flies there.

I would like to express my thanks to the Future Asia Program for providing the funds for the collecting trips.

Khadijah Binti Omar (言語・メディア・コミュニケーション
コース 博士後期課程1年) 調査地: マレーシア

My name is Khadijah Omar and I am a first year PhD student from Malaysia. Early this year, I was fortunate enough to have been awarded a grant from the Future Asia Program Fund, which enabled me to return to Malaysia to carry out the first part of my research. The purpose of this field research was to collect data from Japanese language lecturers at public universities in Malaysia, as well as find potential respondents among their students who are learning Japanese as a foreign language. I visited eight lecturers at six different universities to interview them about the Japanese language programmes offered by their respective institutions.

The objective of my study is to explore the acquisition of requesting behaviour in the Japanese language among Malaysian learners through the medium of online web-based pragmatics training materials. Learners of Japanese often face problems with the pragmatic component of the language such as requests, and this is even more pronounced in a Japanese as a Foreign Language (JFL) context such as Malaysia. Contributing factors include limited exposure to the language and the lack of opportunity to practice the pragmatic points in different situations. The underlying concepts of the Japanese social system make the request speech act even more difficult to acquire.

Although the speech act of requests is a popular topic in interlanguage pragmatics, most of the studies have revolved around requests in English as a Second or Foreign Language (ESL/EFL). However, pragmatic features are often language-specific, and more research is needed within the scope of less commonly taught languages such as Japanese. My study proposes to investigate the same topic in a JFL context, where the pragmatics instruction of requests to Malaysian students will be explored. These students come from different language backgrounds, and findings regarding how this affects their performance in JFL pragmatics will be an interesting addition to current literature. The results are expected to shed light on the ways pragmatics can be made more relevant to learners who are not exposed to the target language on a daily basis, such as the JFL context in Malaysia.



Syafia Yuslita (言語・メディア・コミュニケーションコース
博士後期課程1年) 調査地: インドネシア

I am Yuslita Syafia, a second-year doctoral student at the Graduate School of Integrated Sciences for Global Society. My research topic is intercultural communication. For my master's thesis, I explored intercultural communication problems of international students in Kyushu University while measuring their intercultural sensitivity level. My research now focuses on the comparison of intercultural communication problems and intercultural adjustment of international students in Japan and Indonesia.

Two Asian countries, Japan and Indonesia, own exceptionally distinct characteristics. Japan is one of a few industrialized countries which have not experienced an enormous inflow of international migration. Japan is a nearly homogenous country, comprising, according to The World Factbook, 98.5% ethnic Japanese. This implies that Japanese people have little experience of intercultural communication. In contrast, Indonesia is a diverse country culturally, ethnically, and linguistically. Indonesia is home to 1340 ethnic groups and 1211 local languages. Since there are thousands of ethnic groups in Indonesia, Indonesian people are accustomed to communicating inter-culturally on a regular basis.

However, the present state of the intercultural studies

○○○ リーディングプログラムレポート

exhibits a generalization of cultural-level analyses, such as so-called “Asian communication styles”. The earlier research tends to label all Asian countries are the same, while in reality, Asian countries are much more complex and heterogenic. Only East Asian communication literature offers prominent examples of deriving theories from local traditions in Asia so far. Hence, I try to investigate not only East Asian countries (Japan) but also Southeast Asia countries (Indonesia) for a better, more accurate understanding Asian culture and communication processes.

The Future Asia Program has supported my field research to Indonesia last February. I visited five universities, Semarang State University in Semarang, Gadjah Mada University and Respati University of Yogyakarta in Yogyakarta, also Indonesian Institute of the Arts Surakarta and Sebelas Maret University in Surakarta. My field research aimed to gather data of international students about intercultural communication behaviors and intercultural adjustment quantitatively and qualitatively. I gained a better understanding of this topic from a broader viewpoint. I will continue to collect data in Japan for further study.



Sean Sebastian Hudson (包括的東アジア・日本研究コース
博士後期課程2年) 調査地: イギリス

I am a doctoral candidate studying internationally popular Japanese cinema. I am especially interested in the production of popular films and their images insofar as they pertain to geopolitical and ideological discourses such as Orientalism and nationalism. The objects of research for my thesis are the animated films of Studio Ghibli and

the Japanese horror films known as J-horror, two groups of films that transformed the Japanese film industry through the processes of globalization at the turn of the millennium.

In order to further research these films and their para-texts, I travelled to the United Kingdom so that I could access the material available at the library of SOAS University in London. This library is one of the largest resources on East Asian cultures in all of Europe. Being the UK also allowed me to access a large number of English-subtitled DVDs from the library and from specialist retailers. As I am especially interested in the global reception of Japanese films, noting how they are represented as material products outside of Japan was of great use to my project: newspaper articles, shelving space in retailers, the popularization of supplementary texts such as readers’ guides and so on all contributed to my overall research.

I am grateful to the Future Asia Programme for funding my fieldwork and allowing me to fulfill my research goals in a smooth and organized manner. I look forward to working with them again in the future.



Hiro Mitsuo Hayashi (包括的東アジア・日本研究コース
博士後期課程3年) 調査地: 広島

My name is Hiro Mitsuo Hayashi. I am a British doctoral student in Kyushu University’s Graduate School of Integrated Sciences for Global Society (ISGS). During my undergraduate studies at the School of Oriental and African Studies (SOAS) I spent a year in Kyushu University as an

international exchange student. I then returned to enter Kyushu University's graduate school. I completed my Master's in the Humanities Department and then moved across to the ISGS to work on my PhD. I primarily look into the impact of the atomic bombing of Hiroshima and Nagasaki on minority groups.

My PhD thesis examines the experience of hibakusha (atomic bomb survivors) from hisabetsu burakumin (name given to an outcast group in Japanese society) communities, specifically at how people from low social economic groups are at increased risk both during and after tragedy. Research into this field shows that there was not one homogenous group of atomic bomb survivors, while also preserving the memory of hibakusha from marginalized groups. Looking into the experience of a community at the edge of society also tells us more about Japan in both the pre-and post-war period.

The Future Asia Program has been a great help deal during my time as a graduate student. The support staff and professors associated with the program have been incredibly kind, accommodating and a constant source of support. Funding from the program has helped me travel to Hiroshima multiple times. Visiting Hiroshima was important as researchers who specialize in my field are based in the city. I used these trips to carry out field work and collect information that is essential for my area of study. Finding the time to visit Hiroshima proved difficult due to work and university commitments. However, the Future Asia Program staff were very understanding and flexible. With their support I was able to re-arrange my schedule and have enough time to visit Hiroshima. During my field work I visited various museums, libraries, and archives around Hiroshima. I collected valuable data that cannot be accessed outside of Hiroshima. I was able to locate city records and atomic bomb survivor testimonials, which I plan to reference in my thesis. I also had the chance to become more familiar with the area of the city that I am studying. The staff I encountered were helpful and provided me with valuable advice. I developed good contacts that will be useful for future research. My research has progressed dramatically since joining the Future Asia Program. I hope to maintain close ties to the program in the future.

私はHiro Mitsuo Hayashiです。私はイギリス出身で、九州大学地球社会統合科学府博士課程の学生です。ロンドン大学東洋アフリカ研究学院 (SOAS) の学部課程時代に、九州大学で国際交流学生として1年間過ごしました。その後九州大学大学院に入学しました。私は人文科学府で修士課程を修了し博士号を取得するために地球社会統合科学府博士課程に進学しました。私は、広島と長崎の原爆が少数民族や被差別部落民に及ぼした影響を研究しています。

私の博士論文は被差別部落民から被爆者の体験を検証しています。この調査では、原爆悲劇時および悲劇後の両時期で、低社会経済的集団がどのようにリスクが高まっているかを調べます。この分野の研究は、社会的に無視されていた集団の被爆者の記憶もまた維持しながら、原爆被爆生存者には同一群の被爆者の生存者集団は一つもなかった事を示している。社会の片隅にいるグループを強調することは、また戦前期と戦後期の日本の社会について私達にもう少し詳しく説明することになる。

フューチャーアジアプログラムは、大学院生としての私の学生時代の大きな助けになっています。プログラムに関係しているサポートスタッフと教授たちは、非常に親切で、寛容で、絶え間ないサポートをしています。プログラムからの補助金は、私が広島に複数回旅行するのに役立ちました。私の研究分野を専攻する研究者達は広島を拠点にしていますので、広島を訪れることは重要でした。私はこれらの旅行を使いフィールドワークを行い、自分の研究分野に欠かせないデータを収集しました。広島を訪れる時間を見つけることは、仕事と大学での授業等の拘束時間のために困難でした。しかし、フューチャーアジアプログラムのスタッフは非常に思いやりがあり柔軟でした。スタッフの支援により私はスケジュールを変更することが出来、広島を訪れるのに十分な時間を見つかることができました。フィールドワークの間、私は広島市内周辺の様々な博物館、図書館、公文書館を訪れました。私は広島市以外ではアクセスできない貴重なデータを収集することができました。私は広島市の記録と原爆被爆者の証言を探しました。私はこれらを私の論文で引用します。私はまた、私の研究の対象となる広島市内と分野にもっと慣れ親しむ機会を得ました。私が出会った(博物館、図書館、公文書館の)スタッフは頼りになり、貴重な助言を私に提供してくれました。私は将来の研究に役立つ有用な問い合わせ先を開拓しました。私の研究は、フューチャーアジアプログラムに参加して以来飛躍的に進歩しています。私は将来プログラムとの緊密な関係を維持したいと考えています。

○○○ リーディングプログラムレポート

Hao Xiaoyang (包括的東アジア・日本研究コース 博士後期課程3年) 調査地: 東京・台湾・中国

My dissertation is a multidisciplinary project focusing on the ways in which a series of trials dealt with sexual violence—rape and sexual slavery—against Chinese women during World War II. I do textual analysis for all the trials and conduct interviews with relevant personnel involved, the postwar reparation trials in the 1990s and early 2000s and the people's court in 2000 in particular.

By examining the legal treatment of sexual violence in each trial, this project intends to shed light on the changing concept of justice for women and the relationship between (gender) justice and reconciliation, in different judicial contexts varying from retributive justice to restorative justice.

I would like to extend my gratitude to the Future Asian program, which generously funded my field research in Taiwan and Tokyo in March 2018. I collected the documents related to the policy of the trials conducted by the Nationalist Chinese and gathered some of the court records of the postwar reparation trials. With these valuable historical documents, I will be able to analyze the trials in depth and further develop my dissertation project.



Nguyen Van Thinh (包括的地球科学コース 博士後期課程3年) 調査地: ベトナム

My name is NGUYEN Van Thinh, a PhD student of ISGS. My major is soil and water conservation, focusing on the contamination of toxic elements, such as arsenic, lead and cadmium, in the soil and water environment.

I started to take part in a research when I was an undergraduate student at Vietnam National University of Agriculture (VNUA). During the time at VNUA, I studied about the movement of some heavy metals in soil cores, which were contaminated by industrial wastewater, using mathematic models. Right after receiving my bachelor degree, I worked as a researcher at the same university, where I had chances to cooperate with many foreign scientists, especially Japanese scholars. In order to increase quality of the research and get a bird's eye view in my field study, I decided to choose ISGS as the destination for my master and doctoral courses. My studies in Japan were mainly concentrated in the trace toxic metal contamination of agricultural soils in Vietnam using advanced the equipment and devices found at Kyushu University. With the support of my professors and ISGS's staffs, I have published scientific articles in several international academic journals. In the future, I would like to continue my academic work to contribute more helpful knowledge to the human race.

I would like to thank all staff of Advanced Global Training Project for Integrated Academic Education, who kindly assisted me to get the support for my field work in Vietnam and pay the publication fee in academic peer-reviewed journals. I hope that the Global project will continuously support more students in the future.



Blaž Miklavič (包括的地球科学コース 博士後期課程3年) 調査地: 沖縄

“Science is not only a disciple of reason but, also, one of romance and passion.” These are the words of Stephen Hawking, one of the greatest minds of 20th and 21st century. With this in mind, I have been harnessing my passion for knowledge and discovery throughout my PhD study at ISGS. Fun is not a straight line, neither is the research path which keeps winding at every discovery, leaving the researcher in continuous suspense of what might happen next. My research focused on very rare calcite cave formations found on a small Okinawan island. These peculiar formations can be eloquent lecturers of past sea-level change and can thus help us understand future sea level trends that follow inevitable climate change. Towards the end of my research path I needed to reinforce my findings and with the help of this ISGS programme I managed to obtain the necessary field data and also answer some pending questions. But as is usually the case, one answer just opens a fan of new questions. It is ironic, isn't it?



フューチャーアジア創生を先導する 統合学際型リーダープログラム 平成29年度後期～平成30年度前期 授業報告

グローバル化プロジェクト推進室



本プログラムは、産学官民の連携による、地球社会的視野に立つアジア・イノベーション人材の育成を目的とする博士課程教育プログラムです。

平成29年度後期にはプログラム生を対象とした授業である「フューチャーアジア研究I」と「フューチャーアジア連携プロジェクトI」を実施し、平成30年度前期には「フューチャーアジア研究II」と「フューチャーアジア連携プロジェクトII」を実施しました。加えて数件のプログラム活動を実施・開講しました。以下に同期間中に実施した特筆すべき授業や企画について紹介します。

【平成29年度後期】

糸島市と鉧路市の地域活性化の現場から学ぶ

鉧路ゲストハウス「休坂」の増田和美氏、鉧路市民グループ「クスろ」の名塚ちひろ氏・夏堀めぐみ氏、合同会社よかごつ代表の大堂良太氏、糸島市企画部地域振興課係長の大鶴泰輔氏を講師に招き、フィールドトリップ／講義「糸島市と鉧路市の地域活性化の現場から学ぶ」を実施しました。



糸島古民家「熱風寮・糸」(糸島市志摩櫻井)にて

授業の前半では福岡県糸島市の古民家「熱風寮・糸」を訪問し、大堂氏より「九大生と連携した地域活動について」をテーマにお話をいただいた後、糸島市役所にて大鶴氏より糸島市の移住・定住と九大との連携の取り組みについてご説明いただきました。

授業の後半では伊都キャンパスにて増田氏・名塚氏・夏堀氏より鉧路市における地域活性化に関してご講演いただきました。

新しいメディア時代のアジア共生社会をめざしてー

2017年11月23日(木・祝) ジャーナリストの堀潤氏、福岡市人権啓発センター講師の朴康秀氏、東京大学大学院博士課程の于寧氏を講師に招き、第5回フューチャーアジア創生フォーラム「新しいメディア時代のアジア共生社会をめざしてー」を開催しました(詳細は『クロスオーバー』No.43(2018年3月)の特集記事をご覧ください)。



フォーラム講演者

研究と実社会のつなぎ方

本プログラム生の現役・修了生として前田瞳氏(財団法人日本立地センター)、毛雪梅氏(マツダ株式会社)、陳帥氏(地域日本語教育活動)、坂井華海氏(くまらボフェロー)、加藤大智氏(トビタテ!留学JAPAN)ならびに比較社会文化研究院・学府出身の教員として京都大学名誉教授の清水展氏、名古屋大学准教授の目下渉氏、関東学院大学講師の乗松優氏を講師に招き、座談会「研究と実社会のつなぎ方」を開催しました。

第1部では、現役のプログラム生から自身の研究活動についての発表があり、プログラム修了生からはプログラムの経験の実社会での活用についての報告がありました。

第2部では、アジアの諸分野を研究対象とする3名の先生方にそれぞれの研究テーマ(スラムでの社会秩序、ボランティア活動における参与観察など)に沿った発表をしていただきました。

統合学際研究法

フューチャーアジア・プログラム授業

第1部
「大学院での学びを
実社会で活かす」

【発表者】
フューチャーアジアプログラム生
(現役および修了生)

プログラム
10:30~10:40: 趣旨説明
10:40~11:10: 前田瞳(プログラム修了生、
財団法人日本立地センター)
11:10~11:40: 毛雪梅(プログラム修了生、
マツダ株式会社)
11:40~12:00: 休憩
12:00~12:20: 陳帥(地域日本語教育活動)
12:20~12:40: 坂井華海(くまらボフェロー)
12:40~13:00: 加藤大智(トビタテ!留学JAPAN)
13:00~13:30: 質疑応答・意見交換会

1/19(金)

【10:30~13:30】

伊都ゲストハウス
多目的ホール

研究と実社会のつなぎ方

【講師】
比較社会文化研究院・
学府出身の大学教員

第2部
「研究者としてアジアの
課題に取り組む」

1/20(土)

【13:00~16:00】

比言文棟321会議室

プログラム
13:00~13:10: 趣旨説明
13:10~13:50: 乗松優(関東学院大学兼任講師)
13:50~14:30: 目下渉(名古屋大学准教授)
14:30~14:50: 休憩
14:50~15:30: 清水展(京都大学名誉教授)
15:30~16:00: 質疑応答・意見交換会

対 象: 地球社会統合科学府生

参加方法: 以下の情報をグローバル化プロジェクト推進室までご連絡ください
・氏名、学生番号 ※当日参加も歓迎します

※「統合学際研究法」の授業として受講する場合は大学院内で履修登録を行ってください(単位数: 0.5)

申込・問合せ: 地球社会統合科学府グローバル化プロジェクト推進室(比言文棟3階322)
Tel: 092-802-5670 Email: event@scs.kyushu-u.ac.jp



九州大学大学院 地球社会統合科学府「フューチャーアジアを先導する統合学際型リーダープログラム」

「現実と実社会のつなぎ方」ポスター・チラシ

演劇手法によるコミュニケーション

劇作家で演出家の平田オリザ氏を講師に招き、ワークショップ「演劇手法によるコミュニケーション」を開催しました。

授業の冒頭では参加学生全員が「コミュニケーションゲーム」と呼ばれる基礎的なワークショップを経験し、演劇作りのグループワークを行い、その後平田氏にコミュニケーションの理論や技術についてのレクチャーをしていただきました。



平田オリザ氏によるレクチャー

○○○リーディングプログラムレポート

【平成30年度前期】

社会に必要な「伝える力」

株式会社トライログ代表取締役の平山猛氏、株式会社LbE Japan代表取締役の北浩一郎氏、JICA職員の吉田憲氏を講師に招き、授業「社会に必要な「伝える力」」を実施しました。

第1部では、北氏より協同学習の手法によって学習の理解を深める活動についてご説明いただきました。

第2部では、平山氏よりミーティングソリューションによって問題の解決を図る方法に関してご説明いただきました。

第3部では、吉田氏よりPCM手法を応用した社会的な問題解決手法に関して、ワークショップ形式でご講義いただきました。



ポストイットを用いたワークショップ

九州のインバウンドを考える

プログラム生（修士課程）の坂井華海氏の企画により、福岡県庁国際政策課職員の山口純平氏、熊本市役所観光政策課職員の黒木慎也氏、起業家の任順利氏・菅野幸介氏を講師に招き、授業「九州のインバウンドを考える」を実施しました。

午前の部では山口氏・黒木氏より上海事務所勤務の経験や県の具体的な施策、九州が一体となったインバウンド誘致やPR活動の重要性などに関してご講演いただきました。午後の部では任氏・菅野氏より対中国人を念頭に置いた「モバイル決済とインバウンド」についてご講演いただきました。



「モバイル決済とインバウンド」

内浜小学校訪問

福岡市立内浜小学校を訪問し、同校教諭の池田芳江氏・村岡あすか氏を講師としての交流授業を実施しました。

授業の前半ではプログラム学生が同校で定期的に行われている日本語教室夏期補習に参加し、様々な出身国を持つ子供たちの夏休みの宿題のお手伝いをしました。授業の後半では池田氏・村岡氏より同校の日本語教室の歩み、外国人児童の日本語習得に関わる問題などに関してご説明いただきました。



交流授業の参加者

多文化共生・インバウンド政策提言フィールドワーク in 武雄

プログラム生（博士課程）の山口祐香氏の企画により佐賀県武雄市を訪問し、武雄市市長の小松政氏、武雄市役所職員の中尾雅幸氏、武雄市歴史資料館学芸員の川副義敦氏、タイから移住された鈴木良太氏・ノイ氏ご夫妻、武雄高校生徒会会長の星山真慶氏をはじめとする武雄市役所の皆様、武雄市の住民の皆様、武雄高校の学生の皆様に3日間にわたる授業内で実施された各セミナー／ワークショップの講師・参加者として迎え、「多文化共生・インバウンド政策提言フィールドワークin武雄」を実

施しました。

1日目には、まず武雄図書館を訪問し、川副氏・鈴木ご夫妻から武雄の郷土史や武雄での生活に関するお話を伺いました。その後武雄市役所を訪問し、小松市長との対談を行いました。



小松市長との対談



公開提言発表会参加者

研究調査旅費支援制度成果発表会

本発表会は本学府が実施する「研究調査旅費支援制度」(平成29年度)に採択された学生の調査内容や研究成果を広く知っていただくために企画されたもので、さまざまな専門分野の研究に取り組んでいる9名の学生さん(社会学専攻3名、言語教育専攻1名、文学専攻1名、生物学専攻4名)が昨年度の研究成果報告をしました。

本発表会の最後に行われた表彰式では3名が表彰され、村岡敬明さん(最優秀賞)、Seán Hudsonさん(優秀賞)、王梓さん(優良賞)に表彰状と記念品が贈呈されました。

本学府では、毎年4月に研究調査旅費支援の対象となる研究課題を随時募集しています。来年度も多彩な研究課題の応募が期待されます。

なお、今回の発表については『研究調査旅費支援制度成果発表会論集』(第1号)として本年2月に刊行される予定です。活動の概要については今号の記事をご参照ください。



若木町和樹(なごみのき)工房

2日目には、まず市役所にて観光課および企画政策課・市民協働課の職員の方々に対するヒアリング調査を行いました。その後武雄高校の学生の方々との交流会を兼ねたワークショップを開催しました。

3日目には、本フィールドワークの集大成である公開提言発表会を開催し、参加学生全員で、市長や市民の方々に向けたプレゼンテーションを行いました。

○○○ リーディングプログラムレポート

【平成29年度後期フューチャーアジアプログラム授業】

【フューチャーアジア研究I】

講義名	講師（敬称略）	開講日
「描く力」を身に付ける 研究と実社会のつなぎ方	フューチャーアジアプログラム生 (現役および修了生)	2017/1/19
	清水 展（京都大学名誉教授） 日下 渉（名古屋大学） 乗松 優（関東学院大学）	2017/1/20
研究計画書の書き方合宿	地球社会統合科学府教員（複数）	2018/2/18 ～ 2/19

【フューチャーアジア連携プロジェクトI】

講義名	講師（敬称略）	開講日
「歩く力」を身に付ける 糸島市と釧路市の地域活性化の現場から学ぶ	釧路市民グループ／増田 和美（民宿休坂） 名塚 ちひろ・夏堀 めぐみ（釧路港）	2017/11/15
「率いる力」を身に付ける 第5回フューチャーアジア創生フォーラム	堀 潤（ジャーナリスト／キャスター） 朴 康秀（福岡市人権啓発センター） 于 寧（東京大学大学院博士課程）	2017/11/23
「伝える力」を身に付ける 演劇手法によるコミュニケーション ワークショップ	平田 オリザ（劇作家／演出家）	2018/1/28

【平成30年度前期フューチャーアジアプログラム授業】

【フューチャーアジア研究Ⅱ】

講義名	講師（敬称略）	開講日
社会に必要な「伝える力」	平井 猛（株式会社トライローク） 北 浩一郎（株式会社 LbE） 吉田 憲（JICA）	2018/5/11
研究計画書の書き方セミナー	地球社会統合科学府教員（複数）	2018/5/12
「率いる力」 内浜小学校との交流授業	池田 芳江／村岡 あすか（福岡市立内浜小学校）	2018/7/25
研究計画書の書き方合宿	地球社会統合科学府教員（複数）	2018/8/6 ～ 8/7

【フューチャーアジア連携プロジェクトⅡ】

講義名	講師（敬称略）	開講日
「描く力」 九州のインバウンドを考える	山口 純平（福岡県庁国際政策課） 黒木 慎也（熊本市役所観光政策課） 任 順利（九大出身起業家） 菅野 幸介（起業家） （企画：プログラム生・修士課程 坂井 華海）	2018/7/9
「歩く力」 多文化共生・インバウンド政策提言 フィールドワーク in 武雄	武雄市職員等 （企画：プログラム生・博士後期課程 山口 祐香）	2018/8/27 ～ 8/29

【その他のプログラム活動】

講義名	講師（敬称略）	開講日
研究調査旅費支援制度成果発表会	ハオ シャオヤン・黄 悠然・カディジャ オマー・ ショーン ハドソン・ユスリタ シャフィア・ 村岡 敬明・鄔 亜嬌・許 思寒・王 梓 （以上9名、プログラム生）	2018/8/1

Constructing Colonial Modern Public Health, Education, and Policing

鬼丸 武士

(地球社会統合科学府)

19世紀から20世紀初頭にかけて、世界の多くの地域は欧米列強、並びに日本による植民地統治下に置かれていた。従来、植民地に関する研究は、統治者の側に立った「上から」の視点による研究（例えば植民地行政に関する研究など）と、非統治者の側に立った「下から」の視点による研究（例えば植民地抵抗運動に関する研究など）に、二極分化する傾向があった。しかし近年、植民地という場で、統治者と非統治者の間でどのような相互作用があったのかという視点に立った研究が進みつつあり、その代表的な領域として医療や教育、そして治安秩序維持の問題がある。

2017年12月8日に九州大学伊都キャンパスで開催された Constructing Colonial Modern: Public Health, Education, and Policing と題するこの国際ワークショップは、植民地における医療、教育、治安秩序維持に焦点を当てて、この三つの領域で統治する側と統治される側がいかなる相互作用をおこなっていたのか、そしてこの三つの領域が「植民地近代」を理解するうえでどのような意味を持っているのかを検討することを目的としていた。

このワークショップは、現在も進行しているオックスフォード大学の Wellcome Unit for the History of Medicine との間の国際共同研究の一環として開催したもので、オックスフォード大学のマーク・ハリソン先生 (Director of the Wellcome Unit for the History of Medicine)、九州大学からは地球社会統合科学府のアンドリュー・ホール先生、そして鬼丸が報告を行い、大阪市立大学の脇村孝平先生にコメントを務めていただいた。

地球社会統合科学府のマシュー・オーガスティン先生の司会進行のもと、まずマーク・ハリソン先生が近代医療の歴史とそれが植民地でどのように展開されたのかについて、主に英領インドを事例にしてお話いただいた。植民地における近代医療の受容が一筋縄ではいかなかったこと、様々な在地医療との間のすり合わせが行われていたことなど、現在の医療史研究の最先端の成果を披露していただいただけではなく、植民地医療や植民地近代の問題が、例えば現代におけるWHO（世界保健機構）に

よる途上国での疾病対策が直面する問題を考えるうえでも有益であることなどを指摘された。

続いてアンドリュー・ホール先生が、日本の植民地における教育について、実際に使われていた教科書などを参照しながら報告された。今回の報告では、主に初等・中等教育に焦点を絞り、実際にどのような内容が教えられていたのか、それが日本の植民地統治にどのような意味を持っていたのかなどについてご説明いただいた。

最後に鬼丸が英領マラヤ、主にシンガポールにおける治安秩序維持について報告をおこなった。19世紀には中国系移民が組織した「秘密結社」が、20世紀初頭にはナショナリズム運動や共産主義運動などの政治運動が治安秩序維持上のターゲットとなったことを指摘し、これらのターゲットに対してどのようなサーベイランスが行われていたのか、植民地警察はどこまで実態を把握していたのかなどについて説明した。

以上の報告を受けて、脇村孝平先生からそれぞれの報告に対するコメント、質問をいただいた。その中でも特に重要であったのは、結局、「植民地近代」とはいったいどのように理解すればよいのかという質問であり、この問題は参加者を交えて活発に議論が交わされた。

短い質疑応答の時間では、このような大きな問題に対して明確な解答を得ることはもとより困難である。しかし、議論を通じて、「植民地近代」とは統治者が持ち込んだ様々な装置、医療であれば病院や種痘、医療研究などのシステム、教育であれば学校システムそのものとそこでの教育内容、治安秩序維持では警察機構やサーベイランスなどが、その対象とされた非統治者の受容や抵抗を経て、植民地という場において形作られたものとして理解することが可能なのではないかというコンセンサスを得ることができたように思う。もちろん、これは「植民地近代」を理解する上での一つのアプローチに過ぎないのは間違いないが、植民地統治の現場で何が生じていたのかを丁寧に解きほぐしていく作業を今後も続けることが重要であること、特に医療と治安秩序維持の間には多くの共通点があることが確認できたことは、このワークショップの大きな成果であった。

ワークショップ「島嶼世界のポテンシャル」

伊藤 幸司

(地球社会統合科学府)

地球社会統合科学府の包括的東アジア日本研究コースにおける学際研究の試みの一環として、2018年2月22日(木) 13:30～17:00に伊都キャンパスの伊都ゲストハウスで、「島嶼世界のポテンシャル—玄界灘地域を事例として—」というワークショップを開催した。当日のプログラムは以下の通りである。

壱岐対馬フィールドノート—玄海島嶼研究事始—

長谷 千代子 (本学府准教授)

弥生時代における玄界灘交易のあり方

田尻 義了 (本学府准教授)

島で焼かれた陶磁器

野上 建紀 (長崎大学多文化社会学部教授)

文献史学からみた玄界灘地域

伊藤 幸司 (本学府准教授)

総合討論 司会 鬼丸 武士 (本学府准教授)

ワークショップでは、学際研究の共通テーマとして玄界灘地域の「島」に注目した。現代社会において、「島」は不便な場所であったり、過疎の対象であったりと負のイメージで捉えられることが多い。しかし、「島」は歴史的に見ると交易、交流の結節点として全く異なる意味を持つ。例えば、「島」は物資や情報の集まる場所として、また中継地として捉えることが可能である。そこで、ワークショップでは、考古学・歴史学・文化人類学などの様々な分野から、「島」に焦点を当てた交流に関する事例をあげ、「島」の理解やポテンシャルについて学術的な手法によって論じた。

ここでは紙幅の都合から、文献史学の視角から玄界灘地域の島について述べた伊藤報告の内容の一部を紹介しておこう。

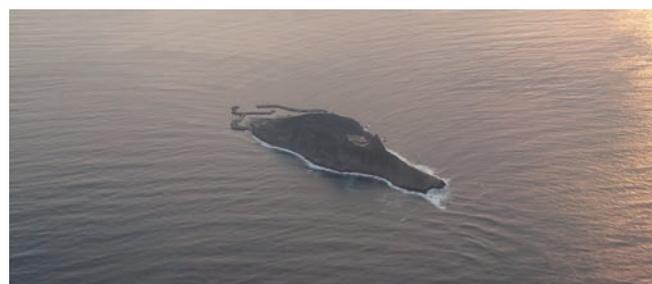
伊藤報告では、玄界灘地域における船の航路の問題について触れた。中世における玄界灘地域のメインの航路は、中世日本最大の国際貿易港博多から壱岐島、対馬島を経て、朝鮮半島東南岸の三浦と呼ばれる薺浦、富山浦(釜山浦)、塩浦の港町を結ぶルートであった。活発な貿易活動を展開した博多商人の朝鮮貿易も、このメインルートを使って行われていた。しかし、玄界灘には対馬から壱岐島、博多方面を経由せずに、対馬島から直接、本州の長門国(現在の山口県西部)へ向かうルートも存在していた。「対馬平山文書」によれば、15世紀半ばに対馬船が玄界灘を直行して長門国肥中関へ行っていたことがわかる。この航路の存在を考えた時、航路上に存在する小呂島(福岡市

西区)や沖ノ島(宗像市)は、中世の船人にとって重要な目印(ランドマーク)としての役割を果たしていたと推断することができる。鎌倉時代に博多綱首謝国明が小呂島に地頭職をもっていたのも(「宗像大社文書」)、こうした航路上の要衝としての島の存在を重要視したからであろう。また、現在、世界遺産となって古代に注目が集まっている沖ノ島であるが、航路の観点からも沖ノ島の重要性はあったといえる。これら玄界灘の島々が、15世紀に朝鮮で作られた日本・琉球ガイドブックともいべき『海東諸国紀』の地図のなかで、「於路島」(小呂島)、「小崎於島」(沖ノ島)として明確に記されているのは、その重要性が朝鮮にも伝わっていたことを示している。

このように、玄界灘地域の島々には、現在の感覚のみでは推し量ることができない歴史があり、その魅力は掘り起こせば次々と発見することができる。今回のワークショップは、こうした島嶼世界のポテンシャルの一端を紹介することができたと考えている。



「海東諸国総図」(部分、『海東諸国紀』岩波文庫、1991年)



小呂島(著者撮影)

学際ワークショップ 「“水惑星”地球の歴史と未来—水から考えるアジア—」

藤 岡 悠 一 郎

(地球社会統合科学府)

2014年以来、本学府が中心となって推進してきた「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」の議論のなかで、本学府の学際教育研究の新たなテーマとして、“水”に注目してはどうかという話が持ち上がった。その最初の取り組みとして、2018年2月9日に学際ワークショップ「“水惑星”地球の歴史と未来—水から考えるアジア—」を九州大学稲盛財団記念館にて開催し、翌日にエクスカージョン「筑後川流域探索」を実施する運びとなった。

本ワークショップは、異なる学問領域における水をめぐる研究課題を紹介し、学際的な議論を行うことで、“水”を包括的に理解するフレームワークを模索すること、また、水という切り口からアジアの地域特性を理解するという二つの目的のもとで企画された。

午前のセッションでは、過去に発生した水難事故の教訓を活かし、教育研究活動での事故を予防することを目的として、安全講習ワークショップを開催した。株式会社アウトドアサポートシステムの北川健司氏を講師としてお招きし、「事故事例から学ぶ野外活動の安全対策」と題するご講演をいただいた。野外での事故発生メカニズムや発生に関わる要因、水難事故の事例、事故を予防するための心得など、自らのご経験を中心に、具体的かつわかりやすく説明いただいた。特に、野外活動のリスクマネジメントを考える際に、計画設計(事前)から活動中(時中)、トラブル発生時の対応策(時後)の三段階を視野に入れる必要があるというご指摘は、極めて実践的な内容であった。ご講演後、参加者と質疑を行い、学生の課外実習等で事故を防ぐための体制作りなど、さらに踏み込んだ知見をご紹介いただいた。

午後の部では、はじめに、小山内康人学府長(本学府)から、「水惑星・地球であるがゆえに…」と題する基調講演をいただき、地球の水の起源や地球に水が存在する理由など、46億年という時間スケールと太陽系という壮大な空間スケールで水を展望していただいた。基調講演の後、「命を育む水」と「荒ぶる水」の二セッションで、計5名の研究者がそれぞれの専門分野から水に関する研究事例を報告した。セッションIでは、はじめに「農業と水資源:環境変化への社会・生業適応」という題で藤岡が報告した。農業と水資源利用に関するアジアの事例を概観した後、東シベリアの永



ワークショップの告知ポスター

久凍土分布域を事例地域として、近年の温暖化にともなう永久凍土融解や水環境の変化に対する住民の生業適応や社会変化について報告した。第二報告は、百村帝彦准教授(持続可能な社会のための決断科学センター)による「水資源への新たな価値の創出と森林管理」と題する発表であった。森林の水源涵養機能に焦点を当て、林業が衰退するなかでその機能をどのように維持していくのかという論点が提示され、日本の森林政策や管理の現状および課題について述べられた。第三報告は、鈴木伸二准教授(近畿大学)の「開発フロンティアとしてのマングローブ湿地」で、ベトナムのマングローブ湿地における開発史の事例が紹介され



学際ワークショップの様子

た。環境保全と経済開発のフロンティアとなり、多様なアクターが入り混じるマングローブ湿地について、J・スコットが国家支配から逃れた人々が集う場所として論じたゾミアを援用し、“海のゾミア”として地域を描写した。セッションの最後に、生田博子准教授(留学生センター)が各発表にコメントし、論点整理と質疑が行われた。

セッションIIは、水がもたらす災害がテーマであった。最初に島谷幸宏教授(持続可能な社会のための決断科学センター)が「河川工学と防災:水害のリスク管理」という題で、九州北部豪雨災害を事例に水害と防災について報告した。災害リスクが、災害強度と曝露、脆弱性の組み合わせで決まることを紹介し、脆弱性を緩和するための取り組みについて具体的な事例を紹介された。次の報告は、竹沢尚一郎名誉教授(国立民族学博物館)による「水の恵みと水のもたらす災厄」と題する発表であり、東日本大震災による津波被害と復興の取り組みについて紹介された。漁師にとって、災いをもたらした三陸の海は豊かな資源であり、復興の過程で再び海と共に生きていこうとする人々の姿を報告した。両報告の後、三隅一百副学府長(本学府)が発表内容に対するコメントを述べ、ソーシャルキャピタルから災害を捉える視点を紹介した。

全報告の後、鬼丸武士准教授(本学府)をモデレーターとして総合討論に移った。各発表に対する質問のほか、水源涵養機能を有する森林を誰が守るのか?、森林保全の受け皿として協同組合方式が有効であるのか?、水の供給から消費過程の不可視化という問題、環境変化に対するレジリエンスをいかに高めるのか?などの重要な論点について、会場の参加者と発表者が意見を交わした。ワークショップの最後に、矢原徹一教授(持続可能な社会のための決断科学センター)が閉会の辞を述べ、日本の森林の非活用と輸入材との関係や海外での地下水くみ上げ問題、バーチャル・ウォーターの視点の重要性などを指摘し、ローカル・グローバルの結びつきに留意しながら水に関する多方面の事象を学際的に俯瞰する視点の必要性を述べられた。本ワークショップの成果として、水という極めて身近な存在を切り口にするにより、現代社会の様々な問題が相互に複雑に絡み合う様相が浮き彫りとなり、学際的な議論の必要性・有効性が再確認された。

翌2月10日にエクスカージョンを実施し、筑後川流域の水管理施設や九州北部豪雨被災地を訪問し、九州の治水の取り組みや水に関わる社会的な課題などについて理解を深めた。

最初に、福岡県久留米市安武町の筑後川中流域に設置されている筑後大堰を視察し、堰を管理する「独立行政法人水資源機構筑後川局筑後大堰管理室」室長代理に大堰の設置経緯や機能について説明を受けた。水道および農業用水の確保や流域の治水を目的に昭和60年に大堰が設置されたこと、筑後川では潮汐によって有明海からの海水遡上が毎日生じるため農業用水に海水が混ざらないように堰で調整をしていること、大雨発生時

には流木などのゴミの回収が課題であることなどが紹介された。大堰見学後、地形図を基に同地域の特徴的な地形や集落分布を把握し、自然堤防上に立地する集落や筑後川の旧河道を視察した。



筑後大堰管理室における説明

次に久留米市新合川に位置する筑後川防災施設「くるめウス」を訪問し、施設スタッフに同施設の機能や筑後川の生物相、治水の歴史などについて説明を受けた。同施設は、昭和28年の大水害の記録を伝え、災害から身を守るための防災の大切さ、河川環境保全や河川愛護意識の啓発を目的として2003年に開館され、ニッポンバラタナゴの学名から施設の名称がつけられたという。また、筑後川の歴史を振り返ると、川の名称に変化がみられることや治水が地域の深刻な課題であったことなどについて説明を受けた。

その後、朝倉市に移動し、福岡県文化財保護課の職員の方と甘木歴史資料館の学芸員の方に九州北部豪雨被災地を案内いただいた。そして、被害の状況や復興の取り組み、被災地における重要文化財保護の課題などについて、説明を受けた。現地では、参加者それぞれの専門の観点から多様な指摘があり、学際的なアプローチの重要性を実感した。エクスカージョン全体を通じ、九州一の流域面積を有する筑後川流域の地域性や治水および利水の歴史的な変遷、現在の課題等に関する学際的な理解を深めることができた。



九州北部豪雨被害の視察

シンポジウム

『アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ— —返還をめぐる科学・文化復興・尊厳の言説』

瀬口典子・太田好信

(比較社会文化研究院)

九州大学比較社会文化研究院 シンポジウム『アイヌ遺骨・副葬品のゆくえ:返還をめぐる科学、文化復興、尊厳の言説』は院長裁量経費によるプロジェクトによる支援をうけ、2018年2月11日にJR博多シティにおいて九州・沖縄や他の地域から来福された数十名の文化人類学、考古学、自然人類学の研究者および学生たちが参加し盛況のうちに行われた。

20世紀初頭から先住民の遺骨や副葬品を収集し、研究対象としてきた考古学、自然人類学、文化人類学は、1980年代以降、先住民からそれらを「本来あるべき場所」に返還するように求められてきた。日本でも1670体を超えるアイヌ民族の遺骨が研究材料として12大学に保管されており、遺骨の返還と適切な埋葬を求める活動は社会的にも注目を集めるようになった。アイヌ民族の遺骨返還運動の歴史から見えるのは、いまだに遺骨・副葬品を研究対象として管理する正当性を疑わない研究者と、人間の尊厳を求める道徳・倫理に根差したアイヌ民族からの主張のズレである。これまでの研究がアイヌ文化復興に寄与するという見解により見えなくなっているアイヌ民族の声を聞き取り、アイヌ遺骨・副葬品の返還を考えるとときに不可欠な、尊厳をめぐる言説の重要性を浮上させるため、本シンポジウムは、考古学、自然人類学、文化人類学のそれぞれの見解と先住民アイヌの見解とを対話関係に置き、返還について考えるときに不可欠な尊厳をめぐるアイヌ遺骨返還を国民的課題として可視化させることを目標とし、両者の和解への第一歩を目指した。

シンポジウムは、代表者の太田好信(本研究院、文化人類学)の問題提起から始まった。グアテマラ内戦時(1960年から1996年)に殺された先住民の遺骨発掘に立ち会った彼は、先住民にとって肉親先祖を弔うことが困難である現状を知り、同時に、形質人類学が先住民のために貢献できる可能性を知ったことを語った。また、米国においては1990年にNAGPRA(Native American Grave Protection and Repatriation Act)が施行され、紆余曲折を経て、先住民の遺骨が返還されていく状況が紹介された。現在では遺骨返還がグローバル規模の連携における

流れであり、返還する側もグローバルな視野で考える必要が求められていること、そして、日本においても、帝国主義が先住民アイヌの近代の経験であるのなら、帝国主義研究のために先住民アイヌの遺骨を収集した側は、アイヌからの遺骨返還の要求に対して真摯に応える責任があること、さらに、遺骨の返還と再埋葬という人間の尊厳、先住民の人権にかかわる課題に対し、優先されるべき科学の知はあるのだろうかという、疑問が提起された。

五十嵐由里子(日本大学 自然人類学)からは、1987年北海道有珠モシリ遺跡の発掘で縄文とアイヌに出会い、二風谷でアイヌ文化とアイヌの歴史を知り、約10年前にアイヌ遺骨問題を知った経緯が語られた。当初は「人骨を残すのが人類学者のあべき姿」と思っていたが、2011年3月の原発事故がきっかけで、自分が「研究を何よりも優先させるべき」という「人類学ムラ」思考に陥っていたことに気づき、ひとりの自然人類学者として、過去の人類学者の行動を、和人、人類学者として反省し、謝罪したいという思いが語られた。彼女にとっての人類学の根底には、対象に対する愛情や尊敬があったはずであった。ならば、相手が一番望むことを最優先させることが、自分自身の人類学にとって最も大事なことであり、その結果「アイヌ遺骨をどうするかはアイヌの方々が決める、だからたとえ研究をしないという結論になっても、その結論に従うべきだ」と心から思うようになったと語った。

加藤博文(北海道大学 考古学)からはアイヌ遺骨問題に考古学はどう関わるべきかが語られた。考古学者は遺骨収集を行ってはいないが、遺骨返還と無関係ではなく、世界各地の遺骨返還問題を研究領域の一つとして取り組んできたのは世界の考古学者である。これは世界的な動きではあるが、日本考古学には同様の動きを認めることができない。その背景には、どのような理由があるのか、これまでのアイヌ研究のあり方、これからのアイヌ研究のあり方を含めて問題に向き合うべき時期にきていると述べた。考古学は地域を研究対象とするので、地域の

人々との相互理解が不可欠である。しかしアイヌ民族にとって研究行為とは、ある日突然外部から押し寄せる文化他者による一方的な侵入行為という側面をもつことを研究者はどれだけ意識しているであろうか。これを意識しなければ、考古学者は外部から侵入する地元の文化を収奪し破壊する文化的他者に過ぎなくなると述べ、相互理解の必要性和研究倫理の整備を強調した。

小田博志(北海道大学 文化人類学)は、誰が、誰に、どこに、遺骨は「返還」ではなくて「帰還」するのではないかと疑問を呈した。1世紀以上を経て、ベルリンから戻った頭骨が北大納骨堂に置かれ、故郷に戻れないままである要因は何なのか。また、1997年アイヌ文化振興法は、文化のみに議論を収斂し、先住権(土地、資源に関する権利)は排除された事実から、このような「文化」を批判するのは文化人類学であるはずと、文化人類学分野の責任を問うた。謝罪のあり方の一つとして、「歴史・文化レジーム」の現状を公表すべきであると述べ、相手を尊重して謝罪し、そうして初めて対等な会話ができると述べた。

差間正樹(浦幌アイヌ協会)からは、民族差別を子供の頃から受け、60歳代後半になるまで悩み続けてきた経験とアイヌ民族として生きていく決意に至るまでが語られた。遺骨返還においては、日本式の埋葬方式、民法が優先され、アイヌの埋葬文化が尊重されていないことを訴えた。アイヌの埋葬は、コタンで人が亡くなると亡くなった順にコタンの墓地に葬る。和人のように家族の墓に埋葬するのではないのだ。先祖は静かに眠りながらカムイの国と現世の間を行き来する。生きている人が墓地に入ると死者の眠りが妨げられ現世に災いをもたらされると信じられているので、墓地には近づかない。しかし、和人は、眠りを妨げ、遺骨を持ち去る時にはアイヌに許可を取らず、返還時には「遺骨を引き取るのは祭祀継承者だけだ」言い、アイヌは二重三重に貶められている。彼は遺骨返還によって、責任の重さを感じ、しかし、カムイノミ、イチャルバを復活させコタンの再生への出発点に立ったと、遺骨返還と先住権の回復について語った。

石原イツ子(サッポロ堂書店)は『人間とはなにか』をアイヌから問うた。彼女は平取町で父は日本人、母はアイヌとして生まれた。アイヌが少しでも混じっていると「アイヌ」とされる。しかし、自分の家族や親戚はアイヌとしては生きてきてはならず、「アイヌ」を語ることはタブーであった。自分がアイヌであることを表に出さずに生きている方がたくさんいるのが現実である。1981年に、開拓民だけではない北海道の歴史、アイヌの歴史を正しく知ってほしいと願い、サッポロ堂書店開設。2016年8月にペンリウクの頭骨に会う。彼女は奪った人は痛みを忘れるが奪われた人の子孫がいるということを研究者は考えてほしいと訴え、「弱者の痛みを知るために想像力を働かすことが大切である。」ということを強調した。遺骨問題をアイヌからの糾弾、和人の罪悪感

の素とするのではなく、お互いに歩み寄りきかけとすることができるはずと語った。

コメンテーターの関雄二(国立民族学博物館 考古学)はアンデスでの発掘調査において、30年前に住民から反発を受け、遺物を扱う意味を地域住民と話し合ってきた経験がある。南米では、欧米と南米の国という格差が顕著で、国内では権力を握る多数派である非先住民と先住民の格差が大きく、社会状況は複雑だそうだ。発表者に対するコメントとして、人類学や考古学の構造的な問題も扱うべきであり、対話し続けることの重要性、アイヌ自身が研究者になること、アイヌの研究者を育てることを目指すべきであること、謝罪のあり方をアイヌ側がどう受け取るかは別問題であり、常に語り合う必要があること、また、差別はだめだという感覚が浸透する社会の必要性、将来のためには過去の責任を持ち続けることなど強調した。

副代表の瀬口典子(本研究院、生物人類学)は米国の状況も説明した。米国では、NAGPRAの施行が先住民と研究者の和解の第一歩になったとはいえ、28年を経てもまだ返還は終わってはいない。返還というプロセスは先住民にトラウマを抱えさせてしまう可能性がある。最初は研究者と先住民の間に対立があったが、次第に良い関係に移っていったミシガン大学の返還室の例をあげた。交流は一方的なものではなく、研究者も先住民から学び、先住民も研究者から学ぶ、という相互に教え合うことが重要であるとの学びがあったことを報告した。米国での人類学の講義では、人類学という分野が先住民の知の遺産、遺骨を侵略してきたことに対する過去の反省から始めるという、日本の人類学とは異なる教育方針があることも付け加えた。

発表後も会場からも多くのコメント、意見が出され、時間ぎりぎりまで有益な議論をすることができた。

最後に、遺骨問題に向き合うことは過去に向き合うことでもあり、研究者とアイヌ、和人とアイヌの関係の構築の第一歩、出発点となる。アイヌであることを表明することが難しい社会では対話を進めるのは容易なことではない。また、日本では過去に人類学が関与してきた植民地主義、帝国主義の歴史を知る自然人類学者は少ないというのが現状である。このシンポジウムを礎として、2018年10月の日本人類学会大会で一般シンポジウム「人骨研究の在り方—アイヌ遺骨が投げかける問題と人類学の未来を考える」を開催し、自然人類学者内部での多様な意見を聴く機会をもったことは大きな収穫であった。これからもこの問題を国民的議論の場へと導きだす努力を続けていきたい。

シンポジウム 「最先端の浅海底地形図づくりとその活用 —沿岸域の科学的理解と利用に向けて—」

菅 浩 伸

(地球社会統合科学府)

人口やインフラが集中する沿岸域は防災上重要な場所であるとともに、観光や漁場としての利用も盛んな場所である。しかし、沿岸浅海域は、その重要性にもかかわらず詳細な地図がなく、科学的調査が進んでいない地域である。

私が専門とする地形学（自然地理学の一分野）でも、深さ百数十メートル以浅の浅海域について扱われることは少ない。約70～80万年前以降の地球上では、寒冷な氷期と温暖な間氷期の繰り返しが約10万年のサイクルで繰り返されている。日本のような水床から遠い地域では、氷期と間氷期の気候変動に伴って海面が130m程度の幅で上昇と下降を繰り返してきた。すなわち、水深130m以浅の浅海域は、氷期に干出して侵食作用を受け、間氷期に水没して堆積作用を受ける。このような場所の地形は、常に陸上にある場所や常に海底にある場所で作られた地形とは成り立ちが異なると考えられるが、これまで実証的な研究が乏しいところであった。

九州大学の先導的学術研究拠点として2016年12月に設立された浅海底フロンティア研究センターは、沿岸浅海域の精密な海底地形図を作成した上で新たな学問領域を開拓すること、自然科学から人文・社会科学に至る広領域の学際研究を推進することを主な目的としている。地形学でも新たな分野となる「浅海底地形学」をつくる端緒となる研究を目指している。また、私が代表者をつとめる科研費 基盤研究 (S) の研究グループでは、地形学のみならず地質学、海岸工学、防災、生物・生態学、海域環境、人文地理学、水中考古学などの専門家とともに学際研究を進めており、その成果が出つつある。さらに、産官学の連携として、沿岸浅海域の探査や利用を目指している官公庁や民間企業などとの情報交換や共同研究を進め、学術と社会の垣根を越える「超学際研究」へと発展させることもできればと構想しているところである。

本シンポジウムは、我々の研究理念と研究構想をあらわす内容で構成し、2018年1月20日（土）13:00より、九州大学椎木講堂大ホールに508名の参加者を集めて行われた。



椎木講堂大ホールで行われたシンポジウム当日の様子
(上段の写真は株式会社リバネス 西山哲史氏による)。

シンポジウムは2部構成で6名の登壇者が講演を行った。第1部は「浅海底の地形図づくり —産学官の取り組み—」と題して、大学・官公庁・民間企業から各1名が、最新の海底地形図作成技術について紹介した。まず私、菅が「マルチビーム測深等を用いた浅海底の地形図づくりとその学術利用」と題して、我々（大学等に属する研究者グループ）で行っているマルチビーム測深技術を用いた高精度浅海底地形図の作成について講演した。詳細な地形図の作成によってフィールドでの潜水調査が可能となり、科学的発見が相次いでいる。パラダイムの変革をもた

らした事例もある。例えば、石垣島名蔵湾は我々が大規模な沈水カルスト地形を発見した海域であるが、これまでサンゴ被度が低いと予想されるなど環境面での評価が著しく低かった海域でもある。ところが、海底地形図を基にした現地調査を実施すると大規模なサンゴ群集が見つかるなど「高く評価される海」へと変化した。

次に、アジア航測株式会社 計測技術部の寺岡仁子氏が「航空レーザー計測 (ALB) による浅海底地形の三次元計測」と題して、航空機を用いた沿岸域のレーザー計測技術を紹介した。航空レーザー計測は、短時間に広範囲にわたる正確な測量を行うことができるため、今後主流となるであろう測量技術であり、災害時の緊急調査にも利用されている。運用コストがかかる航空機を用いるため大学で導入することが難しいが、航空機測量を専門とする民間会社では先進的にこれを導入して事業を開始しつつある。光を用いるため、海域の測量は条件によって厳しい場合があるが、マルチビーム測深を行うことができない海岸付近の極浅海域の測量にはきわめて有用な調査方法である。

さらに、海上保安庁 海洋情報部の松本良浩氏が、「浅海域の水路測量 —新しい調査技術と海図の話—」と題した講演を行った。ここでは明治時代から我が国の海図づくりを先導してきた海上保安庁の測量方法と海図づくりについて報告がなされた。沿岸域の測量は領海の測定などの基礎となる重要な調査である。船舶のために利用される海図は、航行の妨げとなる浅所の水深と位置をわかりやすく標記するため、様々な測深方法によって得られた膨大なデータから極めてわずかな情報のみを取り出して図化する。極浅海域の測深や水際線の設定の難しさについても述べられ、国が進める海域測量の全体像が紹介された。

第2部は「浅海底地形図の活用 —民間利用と学術展開—」と題して、我々の研究プロジェクトの成果のうち、浅海底地形図が民間利用につながった事例と学術展開に活用した事例を紹介した。まず、大阪府教育庁 文化財保護課の中西裕見子氏が、「浅海底地形図を使った沖縄海底遺跡ミュージアム構想」と題した講演を行った。我々の研究グループでは、同海底遺跡にてマルチビーム測深による精密海底地形図を作成した。その結果、遺跡がどのような状況で成立したかを説明することが可能となり国際誌論文として公表した。中西氏はこの成果をダイバーの遺跡見学および保護活動への参加につなげるべく、地元ダイビング協会などと協働する仕組みを作り上げてきた。ここではその具体的な取り組みが紹介された。

つづいて、琉球大学 理学部の藤田和彦氏が「久米島ハテナハマ周辺の海底地形図の学際研究活用と日豪共同研究プロジェクトJASAG」と題した講演を行った。オーストラリアの研究チームと我々の研究グループは、琉球列島の我々の測深海域で合同調

査を始めている。我々の精密海底地形図は、他のサンゴ礁研究先進国でも現状では作成できない詳細な地形図であるため、これを基に先端的研究を積み重ねる計画である。ここでは、その活動について報告された。

最後に、首都大学東京 名誉教授の堀 信行氏が「地図を使って多様性の中に秩序を見いだす —ダーウィンの時代からの試み—」と題して講演を行った。チャールズ・ダーウィンは1842年に「サンゴ礁の構造と分布」を著し、現在でも通用する汎世界的なサンゴ礁地形分布図とサンゴ礁形成論を提示した。ここではダーウィンの足跡をたどりつつ、人類が海図を基に行ってきた科学的探求について紹介された。

以上のように、新たな浅海底地形図を基にして、幅広い学際研究や産官学連携を生み出すことが可能である。今後もフィールドにおける測深技術の向上と、沿岸域の高精度マッピングに関する技術開発・情報交換を進めたい。また、作成した海底地形図上で展開する学際研究によって、沿岸浅海域の総合的環境理解を進めるとともに、浅海域の地形図利用においても新たな展開を生み出していきたいと考えている。

なお、シンポジウム閉会後の懇親会には、北海道や東京、沖縄等の一般企業、官公庁、大学等から36名の方々に参加していただき、たいへん有意義な産官学交流会の場となった。



シンポジウム告知ポスター

本シンポジウムは平成28~32年度 科研費 基盤研究 (S) 16H06309「浅海底地形学を基にした沿岸域の先進的学際研究」(研究代表者:菅 浩伸)の成果の一部である。

国際文学倫理学批評研究会 第八回北九州大会

波 瀧 剛 (地球社会統合科学府)
曹 雅 潔 (地球社会統合科学府博士課程)



2018年7月27日から30日にかけて、北九州市国際会議場において、国際文学倫理学批評研究会第八回北九州大会 (The 8th International Symposium on Ethical Literary Criticism) が開催された。

主体となっているのは、中国に本拠地をおく国際文学倫理学批評研究会であり、同研究会副会長である浙江大学の聶珍鈞教授から依頼を受け、エストニアや英国での開催を経て、アジアでの大会開催に向けて協議を重ね、準備を行ってきた。

大会には、中国や日本はもちろん、韓国、ドイツ、ロシア、ノルウェー、デンマーク、フィリピン、インドネシアなど、さまざまな地域から発表者が募り、230を超える研究者が、基調講演と、32のパネルに会して議論を繰り広げた。これまでもいくつかの国際学会に参加してきたが、日本で開催する文学分野のものとしては非常に大きな学会となった。

28日午前の開催式では、張映川中国在福岡総領事館領事の式辞(代読)、国際文学倫理学批評研究会会長のYale大学 Claude Rawson教授の式辞(代読)に引き続き、大会の開催に当たり、共催を引き受けていただいた本学府を代表して、学府長中野等先生の挨拶が行われた。

開会式に続く基調講演は、聶教授の理論紹介から始まった。文学倫理学批評は、同教授が2004年に提唱したもので、アメリカ倫理批評の影響のもとで誕生し、それ以降広く中国国内に浸透した。2012年には国際文学倫理学批評研究会 (The International Association for Ethical Literary Criticism) が設立され、国際的なネットワークの構築とともに、理論の普及にも積極的に尽力し、今日に至っている経緯が語られた。

他にも、28日から29日にかけて、Wolfgang G. Muller 教授 (University of Jena, Germany)、李俄憲教授 (華中師範大学、中国)、Igor Shaytanov教授 (Russian State University

for the Humanities, Russia)、尚必武教授(上海交通大学、中国)、Kunt Brynhildsvoll 教授(University of Oslo, Norway)、Johannes Noerregaard Frandsen教授(University of Southern Denmark, Denmark)、Maria Luisa T. Reyes 教授(University of Santo Tomas, Philippines)、大嶋仁福岡大学名誉教授と、多くの基調講演者によって、文学倫理学批評に関する活発な議論が展開された。また、各パネルを詳述する余裕はないが、欧米文学、日本文学、中国文学、比較文学、世界文学、児童文学、演劇、文学理論、学際研究、文化研究など、広範囲にわたる研究発表が行われている。

今回の学会開催に関する準備を進めるためには、その規模からしても、本学の大学院生の協力が必須となり、地球社会統合科学府の博士・修士の院生たちから多くの協力を得た。彼らには苦勞をかけた分申し訳ないという気もしているが、国際学会での発表経験とともに、学会運営の実務についても経験を積む良い機会となったので、前向きにとらえてもらいたい。

学会を終えてあらためて感じているのは、主催者に名を連ねた浙江大学世界文学学際研究センターや、華中師範大学国際文学倫理学批評研究センター、華中師範大学『外国文学研究』編集部など、中国国内の文学研究者や研究機関が、国際的な共同研究や、ネットワーク作りに関して、非常に熱心に取り組んでいることである。その姿勢いに学ぶことは多い。

学会の様子については、当分の間は大会用のウェブサイト(<https://iaelc2018.com>)で確認することが可能である。また、文学倫理学批評の研究成果については、聶教授の主宰する国際学術誌(A&HCI)『文学跨学科研究(Interdisciplinary Studies of Literature)』や、華中師範大学『外国文学研究(Foreign Literature Studies)』などを通して知ることができる。



(浙江大学、聶珍釗教授)

私(曹雅潔)は発表者としてこの学会に参加するとともに、学会の準備もお手伝いすることになり、当日を迎えました。運営にも携わり、また、さまざまな方とのやりとりを通して感じたのは、国際性、学際性と多様性に富んだ大会であったという点です。

まず、国際性については、アジア、ヨーロッパ、アメリカから250名近くの研究者が参加したことはもちろん、基調講演者が日本、中国、アメリカ、ドイツ、ノルウェー、デンマーク、フィリピンなど国内外の著名な先生方でした。それだけでなく、研究発表で取り扱われた文学作品も世界各国の広範囲にわたっていました。さらに研究者の国際的な学術交流も盛んで、九州大学の波瀾剛教授と浙江大学的聶珍釗教授が、七通の手紙を通して、アメリカのヘミングウェイの短編小説「老人と海」を巡って、テキストに潜んでいる倫理問題について各自の意見を述べ、議論されていたことも印象的でした。

また、文学領域以外の分野と融合した学際的な研究発表も多くありました。基調講演では、オスロ大学(ノルウェー)のKnut Brynhildsvoll教授が哲学や進化論に着目し、文学における倫理の問題は、全人類の運命につながる問題でもあると主張されていました。イエーナ大学(ドイツ)のWolfgang教授は、哲学者における思想の根源を文学テキストに求め、哲学者たちが文学作品から多くの示唆を得ていたことを明らかにされました。福岡大学の嶋教授は文学と科学の融合を提起し、神経科学・認知科学などの分野は文学研究に新たな方法を提供できるという趣旨の発言をされました。ほかにも、パネル発表で、文学を哲学、言語学、歴史、経済、宗教、教育、自然科学などと結びつけ、文学を研究する際の方法論として、新しい模索を実践していました。

最後に多様性については、基調講演で、南デンマーク大学(デンマーク)のJohannes Noerregaard Frandsen教授がアンデルセン童話の分析を通して、童話には大人も共感可能な実人生のジレンマが見いだされると指摘されました。研究パネルでは、小説、詩歌だけでなく、劇、絵、漫画、ルポルタージュ、SFなど多種多様なテキストが研究の視野に入れられていました。アプローチの仕方も、実証的な考察から批評理論に基づく実践など、テキスト分析の方法もさまざま、非常に勉強になりました。今回の参加から得たものを、今後の研究に活かしていきたいと思えます。

日豪サンゴ礁地形学シンポジウム JASAG 2018 “Interdisciplinary Sciences on Coral Reefs”

菅 浩 伸

(地球社会統合科学府)

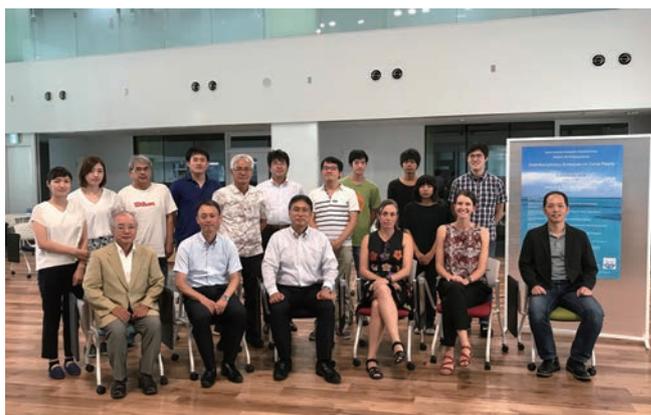
世界最大のサンゴ礁であるオーストラリアのグレートバリアリーフ(GBR)は、総延長2,300kmに及ぶ生物が造った地球上最大の構造物である。そのGBRを舞台に、多くの研究者が研究成果を積み重ね、世界のサンゴ礁研究をリードしてきた。我々の研究グループもオーストラリアと縁が深い。私は90年代半ばにGBRに近いタウンズビルのジェームスクック大学で1年間研究を行った。横山祐典氏はオーストラリア国立大学で学位を取得し、その後も世界各国で活躍している。最近国際統合深海掘削計画(IODP)でGBRの沈水サンゴ礁掘削調査を行ったが、計画を先導した横山氏をはじめ、藤田和彦氏、鈴木淳氏や私など、我々の研究グループの何名かがこの国際共同研究に参加した。

日豪サンゴ礁地形学シンポジウム(JASAG)は、2016年9月にシドニー大学のVila-Concejo博士と当時シドニー大学大学院生であったDuce博士(現ジェームスクック大学講師)が、我々のマルチビーム測深域の沖縄県久米島で共同研究を行ったことから始まる。大型調査船を使って調査を行うGBRでは実施することが難しい浅海域の高精度地形測深を、我々が琉球列島で実施していたためである。

この共同研究の成果を持ち寄って議論するワークショップと、この研究活動を内外に広く伝えるためのシンポジウムを、2017年9月にシドニー大学にて開催した。JASAGはJapan-Australia Sangosho Geomorphologyの略語である。オーストラリアの研究者によって、あえてサンゴ礁の英名“Coral Reef”ではなく、日本語の“Sangosho”が充てられた。シンポジウムには日豪あわせて30名が参加した。

第2回のシンポジウムとなるJASAG 2018は、2018年9月18日(火)13:00~17:00に、九州大学 共進化社会イノベーション施設 2階ホールで開催された。参加者は20名であった。サンゴ礁研究は、生物学・地形学・地質学・海洋学など多くの分野が関わる学際研究であり、今回は琉球列島に関する研究3講演、琉球列島とGBRを舞台とした方法論的研究の2講演、GBRにおける研究2講演が行われた。

まず、菅がIntroductionとして、琉球列島とグレートバリアリーフは赤道を挟んで黒潮と東オーストラリア海流という西岸境界流の



シンポジウムの様子(上)と
シンポジウム講演者・参加者(下)

流れる対称的な海域に位置すること、そこでテクトニクスの違いによってそれぞれ裾礁と堡礁が成立していることから、両地域の比較研究がサンゴ礁の形成過程を論じる上で有意義であることを紹介した。

次に、九州大学大学院比較社会文化研究院・学振PDの平林頌子氏が、放射性炭素を海水動態を調べるための化学トレーサー(追跡子)として利用して、サンゴ骨格中から核実験起源の放射性炭素シグナルを検出し、黒潮を含めた北部太平洋の海洋循環に関して複数の現象を発見したことを紹介した(Western Pacific Holocene variability reconstructed from coral skeletal radiocarbon and Uranium-series nuclides)。

さらに、産業技術総合研究所 地質情報部門 井口 亮氏が、種多様性の高い北西太平洋における海洋生物学の研究成果を

総括し、生物種によっては黒潮が種の分布を広げる役割を果たす場合と、分布を拡大する上での障壁となる場合があることを紹介した(A test of the abundant centre model: a case study of tropical organisms in northern peripheral area)。

琉球大学 理学部の藤田和彦氏は、琉球列島のサンゴ礁域におけるボーリングコアや有孔虫砂を基にした多くの研究例を基に、完新世のダイナミックな地形・地質発達史について詳細な紹介を行った(Holocene coastal environmental changes in the Ryukyu Islands)。

続いて菅が、マルチビーム測深と水中でのフォトグラメトリー(写真測量)を組み合わせた新たな手法による高解像度海底地形図と3Dモデルの作成について紹介し、サンゴ礁地形・生物調査への応用可能性について述べた(Novel mapping of coral reef seafloor: merging photogrammetric 3D model with a multibeam bathymetry)。

ジェームズクック大学のStephanie Duce氏は、グレートバリアリーフでの研究例を基に、ドローンを用いたサンゴ礁地形研究の現状と将来の可能性について紹介した(Principles, practice and possibilities: using drones for coral reef research)。

シドニー大学のAna Vila-Concejo氏は、シドニー大学のリサーチステーションがあるGBRのOne Tree Reefで行われた多くの地形・地質研究をまとめ、サンゴ礁形成過程のうち、特に礁湖の埋積過程について紹介した(Coral reef morphodynamics and lagoon infilling)。

東京大学 大気海洋研究所の横山祐典氏は、GBR沖で行われた国際統合深海掘削計画(IODP)の成果を紹介した。この掘削はJASAGメンバーを含む国際研究グループで実施したものである。この講演では、氷期の気候変動・海水準変動に関するパラダイムシフト的な発見(*Nature* 2018年7月26日号に掲載)と、氷期のサンゴ礁形成に関する新知見(*Nature Geoscience* 2018年5月28日号に掲載)をまとめて紹介した(The Great Barrier Reef environmental change during the last 30,000 years)。

本シンポジウムに続いて、9月19~20日には日豪サンゴ礁地形学ワークショップを開催し、8件の口頭およびポスター発表や、共同研究データや試料を見ながらの討論を16名の参加者で行った。続いて5日間のフィールドワークショップを久米島で実施した。これには3大学から学生が参加し25名の調査グループとなった。ここでは、ドローンを飛ばしての地形写真測量、衛星を利用したRTK測量、サンゴ洲島の砂質堆積物のコア試料採取、離水サンゴ礁の岩石コア採取、波高計を用いた波浪観測、底棲有孔虫の観察など、多岐にわたる調査を実施することができた。

次回のJASAG2019はオーストラリア・タウンズビルのジェームス

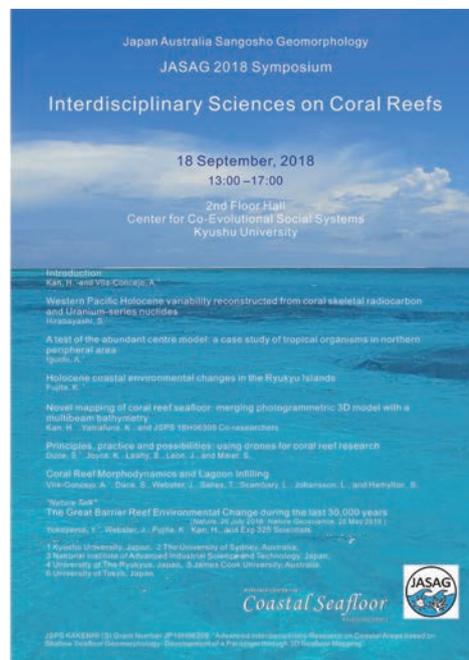
クック大学で開催する予定である。日豪の研究者が琉球列島を舞台として、他ではできない調査・研究を行うことによって、フィールドとしての琉球列島の魅力を世界に発信することができればと期待するところである。



シンポジウム後の2日間にわたって開催されたワークショップでのポスター発表の様子



久米島でのフィールドワークショップの様子(左はドローンを用いた写真測量, 右は離水サンゴ礁の岩石コア採取)



シンポジウム告知ポスター

本シンポジウムは平成28~32年度 科研費 基盤研究(S) 16H06309「浅海底地形学を基にした沿岸域の先進的学際研究」(研究代表者:菅 浩伸)の成果の一部である。

北京外国語大学北京日本学研究センターとの 交流について

波 瀾 剛

(地球社会統合科学府)

坂井 華海・財前 裕一・大久保 歩実

(地球社会統合科学府修士課程)

2018年3月6日、北京外国語大学北京日本学研究センターにおいて、地球社会統合科学府と同センターとの修士課程ダブルディグリーに向けた協議を行うとともに、学術・学生交流の一環として、本学府教員による講演を行った。

本学からはわたしとともに、三隅一百副学府長、松本常彦教授、マシュー・オーガスティン准教授の教員4名と、財前裕一、坂井華海、大久保歩実の修士課程の院生3名が北京外国語大学北京日本学研究センターを訪問した。今回の訪問のきっかけとなっているのは、2017年11月の小山内学府長(当時)と李曉燕助教(当時)の同センター訪問と講演及びダブルディグリーに向けた協議であり、その後2018年1月には、郭連友センター長、曹大峰教授が本学府を訪問され、講演会と第二回の協議に加え、本学府学生とのフィールドワークを実施するなど、積極的に交流を深めてきた。

訪問日当日の午前、ダブルディグリーに向けた協議では、先方から、郭センター長、笠原清志主任教授、宋金文センター副主任教授、周維宏教授、朱桂栄副教授、張彦麗副教授が参加した。北京外国語大学北京日本学研究センターでは、すでに神戸大学、広島大学、岡山大学と修士課程のダブルディグリーを締結して、本学府とも実現に向けて着実に進めていきたいとの前向きな提案があり、本学府としても、継続して調整を行いながら、早期の実現に向けて努力したいという回答を行ったうえで、現時点での解決課題について双方で確認した。

また、学術交流についても、今後、積極的な交流を推進すべく、歴史、文学、社会学、日本語教育など、さまざまな分野での企画を行うことで合意した。さらには、研究成果の共有や、海外研究拠点の設置など、多くの話題を提供し合う、貴重な機会となった。

協議の間、本学府院生3名は、日本文化、古典文学の講義を聴講した。

午後は、松本教授、オーガスティン准教授の2名が、それぞれ、「『羅生門』に潜在する画像イメージ」、「占領下の「脱帝国化」」というタイトルで講演を行った。

松本教授は、芥川龍之介の有名な小説『羅生門』を題材にして、この小説が発表される以前の「羅生門」伝承にみられる画像

がどのように芥川の小説に関わっているのか、また、芥川の描いた羅生門が後の「羅生門」伝承にどのような影響を与えたのかということに関して、現在のコミックスまでを視野に入れて講演した。

オーガスティン准教授は、1945年から52年までの占領期における日本の脱帝国化について、朝鮮、台湾との関係を視野に入れながら、SCAPによる引揚事業や、東西冷戦期における占領政策の転換を通して見えてくる非軍事化と再軍備化の経緯、帝国の解体と戦後の歴史が同時に進んだことの意味・評価について講演した。

それぞれの講演の後、質疑応答の時間では、日本学研究センターの教員だけでなく、大学院院生からも活発な問題提起、質問がなされ、非常に有意義な時間となった。

交流はその後も順調に続いていて、2019年1月には、上海における学生交流会の実施、そして翌2月には、学術交流に関する部局間交流協定の締結が予定されている。2019年度もダブルディグリー締結に向けて、さらに努力していきたい。

<修士2年 坂井華海>

今回の北京外国語大学の訪問中、最も興味深かったのは、参加させていただいた授業で、各学生が自分の故郷について日本語で紹介してくれたことです。

ちょうど訪問した時が後期の第1回目の授業だったこともあって、冬休休暇中に準備した「自分の故郷紹介」を発表する(我々は聞く)というのが授業の内容でした。地名の由来や習俗、伝統に関する話はどれも聞いたことない話ばかりで大変勉強になりました。我々は準備していなかったこともあって、詳しく九州の各県(故郷)や大学について紹介する機会はありませんでしたが、仮にその場で「話してください」と言われてどれだけ説明できただろうかと思いました。中国語ではもちろん、日本語でもおそらく厳しかったと思います。

北京外国語大学日本研究センターの学生は、既に留学経験があったり、これから留学するという人が大半(おそらく全員そう)で、大学院の授業や研究と同様に普段から日本に行くことや日本人と接することを強く意識しているのだろう、と交流する中で感じま

した。それは、我々日本人が中国に関心を持ち、例えば、兵馬俑や万里の長城、三国志、魯迅といったキーワードを手掛かりに知りえる情報と程度の差はあったとしても似ていると思います。

しかしながら、我々がより深い交流するきっかけになるものは、ありふれたイメージや、インターネット検索ですぐに見つかる情報ではなく、顔を合わせて話すことやその人と話すからこそ知りえる情報にあると私は考えます。我々が自己紹介した時、九州大学と聞いて「九州がどこなのか」、「どんな町なのか」を(ごく自然なことだと思うのですが)ピンときている学生はあまりいないように感じました。

「交流したい」、「留学したい」という時に、相手のことやそれを伝えるツールとしての言語は調べたり勉強したりする努力をします。また交流や留学の結果知り得る情報も圧倒的に相手に関する情報かもしれません。しかし、それと合わせてもっと自分のことを知って伝えられるようにしておく必要もあると感じました。

今回は授業に参加させて頂いたおかげで、中国のよく知らない地域の全く知らなかった文化を知ることができました。しかしこれはあくまで一方通行でしかありません。「交流」は相互に交わる努力をして成立すると思います。次回、また交流の機会があるならば、今度こそ双方向に情報・意見交換ができるように、自分の研究分野や自分の身の回りに関する情報収集や勉強に努めたいと思いました。

<修士2年 財前裕一>

まず最も印象に残ったことは現地学生の語学力です。参加した授業の内容は地元の観光スポットを日本語で紹介するというものでした。発表する学生が事前に準備して、日本語で流暢に説明することは当然のレベルで、なおかつ質疑応答もそれぞれがなり流暢に日本語を使いながらおこなっていました。驚くべきことに、質疑応答の中で地域ごとの宗教の話が出た際に、生徒全員が事前準備することなく地元の宗教の詳しい詳細を説明し、各々で議論できていた姿には、同じ学生として尊敬すると同時に私自身の語学力も向上させていくモチベーションにもなりました。

また昼食会では私自身が台湾研究と中国外交研究をしていたこともあり、中国と台湾の関係や台湾の民主主義についての意見交換の場にもなり、私自身の研究への新たな視差を見つけることのできるよい機会になりました。その中で、中国側でも中国政府の発行する意見書や公式文書の翻訳をする際に、まずは中国政府の使う言葉の意味や定義について勉強会を通して共通認識を改めてから外国語への翻訳作業に入るという話は大変興味深く、現場レベルの活動の一端を生々の声で聴くことができた貴重な体験をすることができました。

そして講演会では、松本先生とオーガスティン先生が講演され

ました。日本語でも大変難しく、学術レベルの高い内容だったにも関わらず、多くの現地学生が参加し、質疑応答では活発な意見交換がされていたことが印象的でした。特に文学研究に関しては、羅生門の着物の模様に関する質問が出ており、講義の内容を応用したレベルの高い質疑応答が活発に行われている様子は、日本の大学で行う公開講義では見られない積極性を感じ、良い刺激になりました。

最後に、私が初めて北京を訪れたのは5年前の短期留学で、今回は二度目の北京訪問でした。以前は日中関係の悪化と自身の中国語の不熟さから、受信できる情報が非常に少なかったことが印象に残っていましたが、長期の台湾留学を経ての今回の渡航は人的交流にとどまらず、私に「今の中国」を感じさせてくれる良い機会となりました。このような機会を与えてくださった九州大学と北京外国語大学の両関係者方に感謝し、レポートを締めくらせていただきます。



<修士2年 大久保 歩実>

今回、私は初めて中国に渡航しました。出張に同行する学生という身分ではありますが、北京外国語大学を母校に持つ友人や中国を母国に持つ友人が多いため、友人の母国、母校を訪ねることができるという喜びも感じていました。

北京外国語大学は中国でも有数の名門大学で、キャンパス内は広く大きな図書館やたくさんの研究棟が立ち並んでいました。建物には絶えず学生や教職員の方々が出入りしており、やはり学問、研究というものは世界という大きな基盤のうえで行われていることなのだということを実感として感じることができ、身が引き締まる思いがしました。

中心として訪問させていただいたのは北京外国語大学の日本学研究センターという研究機関です。今回はセンターの方のご好意で、特別に日本語学研究センターの講義をひとこま受講させていただけることになり、到着してすぐに講義の方に参加させていただきました。

○○○ 海外レポート

私が受講させていただいた講義は、冬季集中科目の日本文学の講義であり、二松学舎大学に所属されている多田一臣先生が担当されていました。内容は『万葉集』の額田王の歌である「熟田津に船乗りせむと月待てば潮もかなひぬ今は漕ぎ出でな」の解釈についての講義でした。先生は文法的な要素、および当時の地理的な状況などの条件を検討しながら、現在主流となっている解釈に加えて別の形での解釈を試みるという講義をされていました。先生が講義をされている間、学生の方々も本当に真摯に講義を受講しており、時々質問なども上がっていました。講義のレベルは非常に高く、当然すべて日本語で行われており、学校のレベルが本当に高いことを感じて常に緊張した気持ちで講義を受講していました。しかし、学生の方が私にとっても気を配ってくださって、突然講義に参加した私にテキストを見せてくださり、前回の講義の流れなども都度説明してくださったので講義が終わる頃には私も日本学研究センターの学生の一人のような気持ちで講義を受講していました。

食事を挟み、行われた松本先生、オーガスティン先生の公開講義には、研究分野を問わず、たくさんのセンター所属の学生が参加していました。講義後に質疑応答の時間が設けられていたのですが、設定されていた質疑応答の時間を超えても質問を希望する挙手は止まず、活発な質疑応答が行われていました。

食事と公開講義の合間の時間に、センターの方のご好意でセンター内、北京外国語大学のキャンパス内も少し案内をしていただきました。北京外国語大学に関しても、日本学研究センターに関しても図書館が非常に充実しており、特に日本学研究センターの日本文学、や日本語の蔵書量は本当にすばらしかったです。センターの方からは大学図書館とセンター所属の図書館を合わせても17万冊は日本語の蔵書があり、中国でもほぼ最大の日本語書物の図書館であると説明をしていただきました。図書館内の学生の方がちょうど中座した様子の机の上にはノートと高く積まれた本の山があり、その席に座った方がついさっきまで熱心に本を読まれている姿が見えるようでした。

今回、北京外国語大学の日本学研究センターを訪問させていただいて、その研究機関としての水準の高さにただただ圧倒されるばかりでした。

北京外国語大学の皆様、本学府の皆様、今回は世界レベルの機関と学生の姿を間近で見せていただく得難い機会を与えていただき、ありがとうございました。



博士論文を書き終えて

北 原 優

(比較社会文化研究院学術研究員)

私は2015年の4月に九州大学大学院地球社会統合科学府の博士課程に編入学し、2018年の9月に博士の学位を授与していただきました。私は、学部の4年間は岡山理科大学で学び、修士の2年間は高知大学大学院に在籍し、その後本学に進学しましたので、九州大学での生活は今年(2019年)で5年目になります。本稿では、私のこれまでの研究活動や学生生活、そして博士論文執筆時の思い出などについて振り返ってみたいと思います。

まず私の研究に関してですが、私の専攻分野は「考古地磁気学」と言います。これは、地球物理学的な分析手法を考古学の研究に応用しようという試みのひとつであって、被熱遺物(焼土・土器など)に記録された磁気的情報(専門用語で「熱残留磁化」といいます)をもとにして、その遺物が焼かれた年代を推定する手法の確立を目指す学際的な研究領域です。磁鉄鉱や赤鉄鉱などの磁性鉱物(いわゆる「砂鉄」)を含む土壌や土製品などは、それが焼かれた際に周囲の磁場(通常は地球磁場)の方位と強度を記録する(磁化する)性質を持つことが知られています。そして、この記録された残留磁化は、各種磁力計を用いた精密な測定によってかなり正確に復元することができます。また地球磁場(地磁気)は、地球深部にある液体の金属核(外核)が熱-化学的に対流することによって生成されるので、さまざまな時間スケールで複雑かつ不規則に変動することが知られています。ですから、さまざまな年代の被熱遺物を採取して当時の地磁気を復元し、年代ごとにデータを集成して地球磁場の変動モデル(地磁気永年変化曲線)を構築すれば、年代が未知の被熱遺物に年代値を与えるためのひとつの指標として活用することができます。これが考古地磁気学の基本的なコンセプトです。

では日本において、この考古地磁気学の研究がどの程度進んでいるかという点、日本では古くから焼き物文化が盛んであり(縄文土器から数えれば1万5000年以上の製陶文化を有することになります)、被熱遺跡(とくに考古地磁気の研究に最適な高温で焼成された焼土を採取することができる窯跡など)が豊富に存在しているという背景から、宅地造成にともなう緊急発掘調査が大量に実施された高度経済成長期(1960年代~80年代頃)を中心に飛躍的に発展しました。とくに考古地磁気方位の研究に関しては、70年代に永年変化曲線が作成され、それ以降多くの考古遺跡で年代決定に活用されてきました。しかしながら

考古地磁気強度の研究に関しては、80年代に当時としては相当充実したデータセットが公表されましたが、現在では、実験手法が古いゆえに、このデータセットの信頼性には疑問が呈されています。このような背景から私は「考古地磁気強度の永年変化曲線の作成」をメインテーマとして博士論文研究に取り組みました。

この考古地磁気強度を復元する実験というのは非常に労力がかかる作業であり、実験成功率も低いので幾度となく心が折れそうになりましたが、諸先生方の丁寧なサポート、そして叱咤激励のおかげで西暦200年から1100年を網羅する考古地磁気強度の永年変化曲線を完成させ、3次元(方位+強度)の地磁気情報を用いて年代決定を行うための基礎を固めることができました。指導教員団の大野正夫先生・小山内康人先生・田尻義了先生、そして修士時代の指導教員である高知大学の山本裕二先生、学部時代の指導教員である岡山理科大学の畠山唯達先生をはじめとする先生方にはどれほど感謝してもしきれません。何よりも主指導教員の大野先生には、高知大学在籍時に、修了後の行き場に困っていた私を拾っていただいたご恩があるのに加えて、九州大学に移ってからは研究の進め方や実験データの解釈の仕方、そして研究以外の日常生活に至るまで本当に親身になって相談に乗って下さいました。また、博士論文を無事(?)に仕上げることができたのも、もともとのおんびりしている上に踏ん切りがつかなかった私に先生が発破をかけて下さったお陰です。この紙面を借りて厚く御礼申し上げます。

私が博士論文をこうして書き上げることができたのは、なによりも諸先生方のご指導の賜物なのですが、いま振り返ってみると、それと同じくらい学府の友人たちの存在が大きかったように思います。この学府には、さまざまなバックグラウンドを持った学生たちがいます。研究テーマは私の専攻である地球物理学やその隣接分野である鉱物学や地理学等に限らず、昆虫の分類・人骨の分析・日中交流史・近代文芸批評・日本語文法など非常に多岐にわたっていて、出身地も日本のみならず、中国・韓国・ベトナムなど様々です。博士論文執筆に限らずとも、このような異なる分野で学ぶ友人たちと休憩室でお弁当を食べながら他愛もないおしゃべりをしたり、ファミレスで延々と馬鹿話をしたりする中で、いままで気付かなかったことや見逃していたことにふと気が付くということがしばしばありました。さらに言えば、自分がこれまでに知っている世界などほんのわずかなものであり、自分

○○○ 博士論文を書き終えて

の身の周りにはまだよく知らない魅力的な学問の世界が広がっているのだということに気が付くことができたのは、在学中の何より貴重な経験でした。(あくまで私の個人的な所感ですが、大学や所属学会が企画する仰々しいセミナーや交流会よりも、こういったインフォーマルな空間での方が学ぶことが多かったような気がします。)このような機会に恵まれたのも、私が進学したのが理学府でも人文科学府でもなく、この地球社会統合科学府だったからこそだと思います。

こうして改めて振り返ってみると、「統合的学際性」をテーマに掲げるこの学府は非常に大きなポテンシャルを持っているとつくづく感じます。現在、本学府ではこの学際性をいかに実現すべきか盛んに議論されています。しかしながら、よくよく考えてみれば、人間が文字を使い始めた時代から20世紀初頭に至るまで、学問とは本来学際的なものであったわけですから、天文学者や気象学者たちは「天文」を観察することによって「天道」を理解しようとしてきましたし、地質学者や生物学者たちは「地文」の採録によって「地道」に、史学者や文学者たちは「人文」の記述によって「人道」に迫ろうとしてきました。そして、それらの専門家たちがそれぞれの視座から「道之文」を解き明かそうと試みていたという意味において、百学は目的を共有し、緩やかに繋がりがあっていただけです。その後、学問は細分化の道を辿り、専門や価値基準の異なる人間同士の交流が徐々に失われて現在に至っているわけですが、この学府にはこれだけ大勢の個性的な学生たちがいるわけですから、学生同士が所属研究室や分野の流儀に縛られずに自由に歓談できる環境さえ整えば、この現代において再び諸学を統合し、新たな領域を切り拓いていけるはずだと(少々楽観的過ぎるかもしれませんが)私は信じています。

そのほか「フューチャーアジアプログラム」を中心として、アジア研究を志向した研究・学習環境が整備されているのもこの学府の魅力的なところだと私は感じています。アジア圏あるいは東洋の文化や学知というものは、このグローバル化されゆく現代社会においては無用の長物であるとして軽視される傾向があるように思います。しかしそこには、この上なく美しく、奥深く、示唆に富むものが無数に存在しているわけですから、これらを見逃すことなく、さらに発展させていこうとする本学府の取り組みは、この時代においてとても革新的で素晴らしいものに思えます。しかしながらひとつ気になるとすれば、学府の研究集会やワークショップにおいて、アジア圏における、異なる価値観を持った人々との対話や交流の促進をテーマとしたときに検討される方法論が、経済的・政策的なものに偏っているような気がするのです。これももちろん重要ですが、それと同時に、互いに詩文を論じ、音楽を愉しみ、相手の文化に畏敬の念を抱いてこそ、真の相互理解に繋がる第一歩となるのではない

でしょうか。そしてこのような文化的コンテンツの収集や分析・再発信といった活動は、商業主義と一定の距離を置いたアカデミアの領域でこそ実現できることなのではないでしょうか。浮世離れした生意気な考えなのは承知しておりますが、それでも私は、これがアジア(東洋)世界の再興のためには欠くことのできない投資であり、同時に、現実(存在・社会)の多義性や複雑性を再認識し、一元化された価値基準や単純化された言説に抗うための強固な根拠になり得ると信じています。

私は現在、比較社会文化研究院の学術研究員として働かせていただいております。自分のマイペースすぎる性格ゆえに先生方や友人たちには日々迷惑ばかりかけておりますが、少しでもこの学府・研究院の発展に貢献できればと心から願っております。

最後になりましたが、これまで支えてくださった先生方や友人たちに改めて深く感謝を申し上げます。

〈追記〉

本博士論文の執筆にあたり、地球社会統合科学府の「統合的学際教育を基盤とする高度グローバル人材養成プロジェクト」には、英文校閲支援と論文掲載料支援をしていただきました。この紙面をお借りし、改めて御礼申し上げます。



窯跡での考古地磁気サンプリングの様子
(岡山県備前市・佐山東山奥窯跡)

博士論文を書き終えて

北野 一平

(九州大学大学院比較社会文化研究院)

(学術研究員)

私は、2018年3月20日、小山内康人先生のご指導の下、九州大学大学院地球社会統合科学府の博士後期課程を修了し、博士号を取得しました。小山内先生には、私が学部2年生の頃から個人的に様々なご指導をしていただき、学部2年間、修士課程2年間、博士後期課程4年間で合計8年間もお世話になりました。そして、現在も小山内先生に学術研究員として雇っていただいています。

私の専門分野は地質学で、地球の殻にあたる「地殻」の内部を構成する岩石「変成岩」を対象としており、この「変成岩」を研究することで、地球の過去の様々な地殻変動の記憶をたどることができます。私が地質学を専門とするようになったきっかけは小山内先生の講義を受けたことです。その講義の巡検で能古島へ行き、石の欠片一つからその岩石の形成条件・時代を語っている姿に感銘を受け、何億年前の岩石を実際に自分の手に取って目で見ることができると面白さを感じました。その後、友人とともに小山内先生の研究室を訪ね、南極や変成岩について写真とともにわかりやすく説明していただきました。その時から、南極の風景が刻み込まれ「南極へ行ってみよう」と思うようになりました。そして、北海道・日高山脈の調査に同行させていただき、地下足袋をはいて沢の調査を行い、野外調査のいろはを教えてくださいました。今では、この経験が私の野外調査の原点となっています。

修士課程から小山内先生の研究室に所属し、東南極セールロンダーネ山地の変成岩形成史について研究をしました。念願の南極の岩石の研究を進めつつ、国内外各地の野外調査および



南極での調査の様子

様々な最先端機器を用いた分析の経験を積んでいきました。しかし、修士課程ではデータの解釈に分析した岩石の野外での産状がいかに関心かを身に染みて痛感しました。そして、博士課程ではスリランカの変成岩の研究を行い、広域野外調査を4回実施しました。そのうちの2回は単独での調査であり、主体的な調査の重要性を実感するとともに、安全第一に臨機応変に調査を進めることを心得ました。そして、修士課程の経験を活かして、大量の試料の分析をこなし膨大なデータを取得しつつ、積極的に学会で発表していきました。そして、博士課程3年の時に、小山内先生より第58次南極地域観測隊への同行者としての参加を尋ねられ、ハトが豆鉄砲を食らったような顔をして「ぜひ参加したいです」と答えたことを覚えています。小山内先生をはじめ多くの方々のおかげで、第58次南極地域観測隊で夢に見た南極へ行き、調査の成果を上げて無事に帰国できました。そして、1年延長して博士論文を書き上げ、博士号を取得しました。未熟な私がここまでこれたのも、いつも叱咤激励し、多くの貴重なチャンスを与えてくださった小山内先生のおかげです。そして、中野伸彦先生、足立達朗先生の惜しみないご助力をいただき、研究室の諸先輩方および留学生たちにも何度も挫けそうになった背中を押していただきました。この場を借りて、上記の方々、および地球変動講座の諸先生方、西日本東南極地質グループの皆様、そして、いつも寄り添ってくれた家族に心より感謝申し上げます。



スリランカでの調査の様子

"After making up a doctor thesis"

Nguyen Van Thinh (Ph.D)

(Institute of Tropical Agriculture, Kyushu University)

My name is Nguyen Van Thinh, a postdoctoral fellow at Institute of Tropical Agriculture, Kyushu University. I am a former student of Earth Science and Environmental Changes lab., Integrated Science for Global Society (ISGS) faculty.

I studied master's course at the faculty of ISGS, Kyushu University from 2013 to 2015. After finishing the master's degree, I luckily gained the MEXT scholarship for my doctoral course at the same faculty. I have graduated the PhD degree in April 2018. My research field is environmental contamination, which focused on the arsenic in soil and sediment. I have published 6 academic papers and 8 conference proceedings during my study at ISGS.

The purposes of my study are: 1. To access the contamination status of arsenic and other toxic heavy metals in agricultural soils; 2. To determine the sources of these toxic elements; and 3. To find the best method to remediate the contaminated soils. In my PhD thesis, I focused on the soil contamination in the biggest estuarine ecosystem in the northern Vietnam. This is the first study that showed the arsenic contaminated situation of the soils and sediment in different land uses in the research area.

Under the kind supports of my supervisors, especially Prof. Yasuhito Osanai, many good results about the adsorption phenomenon of arsenic on surface of soil minerals were obtained by using the modern equipment. At ISGS, graduate student can use many advanced facilities, such as FE-EPMA, LA-ICP-MS, SEM, XRD and XRF for the research purposes without any fee. It is the strong aspect of ISGS, which is not easy to do such that in other institutes. In addition, the student of ISGS has opportunities to get many financial supports for publication and conference participation. Actually, I could not participate the conferences in Japan and oversea countries without the supports from ISGS faculty during my PhD course.

Besides studying in laboratory, I have also got a lot practical knowledge in the field. We went to many rural areas in Japan to take sample and do the experiments. I was extremely nervous for the first field work with my lab, because I had

never slept in a tent before. However, everything was fine, and I gained a lot experience thanks to the supports from my professor and my friends, who taught me how to survive in the difficult conditions. As my opinion, the student will be matured a lot when combining study in lab and practical condition, and I have been trained by that way at ISGS.

While writing these lines, I am using the scientific skills, knowledge and experiences that I learned during study time at ISGS for my current research. Thus, I would like to use this chance to express my gratitude to my supervisors, the teachers and staffs at ISGS for their kind supports. I hope more and more students will graduate at ISGS to contribute to the science and development of humanity.



Photo 1: Our fieldtrip in Kumamoto prefecture, May 2017.



Photo 2: Our fieldtrip in Iki island, Nagasaki prefecture, October 2017.

修士学位取得者及び論文題目一覧（大学院地球社会統合科学府）

授与番号	学位の種類	氏 名	専 攻	修 士 論 文 名	授与年月日
地球社会修 第 123 号	学 術	アイ 艾 文 婷	地球社会 統合科学 専 攻	宮崎駿のアニメ作品における物語の研究	2018年 3月20日
地球社会修 第 124 号	理 学	アブドゥルザダ グラム ナビ	地球社会 統合科学 専 攻	Petrology of metamorphic rocks from the Kabul Block, Afghanistan	2018年 3月20日
地球社会修 第 125 号	学 術	アルサギール オムネヤ ハサン	地球社会 統合科学 専 攻	日本人とエジプト人の謝罪意識の対照研究 —社会的地位及び責任の所在に注目して—	2018年 3月20日
地球社会修 第 126 号	学 術	い飯 しま ちから 飯 島 力	地球社会 統合科学 専 攻	サンフランシスコ市ミッション地区のジェント リフィケーションとラティーノ壁画 —This Place... と Carnaval に着目して—	2018年 3月20日
地球社会修 第 127 号	理 学	い とう はや と 伊 藤 勇 人	地球社会 統合科学 専 攻	オオルリシジミ（鱗翅目：シジミチョウ科）の 分子系統地理学的研究	2018年 3月20日
地球社会修 第 128 号	理 学	い かわ ゆう すけ 及 川 優 介	地球社会 統合科学 専 攻	伊豆諸島のノコギリクワガタ類に関する分子系 統学的研究及びハチジョウノコギリクワガタの 自然史学的研究	2018年 3月20日
地球社会修 第 129 号	学 術	おう せい ぶん 王 婧 雯	地球社会 統合科学 専 攻	原子力災害からの地域経済復興 —福島県の農業復興の課題	2018年 3月20日
地球社会修 第 130 号	学 術	おう せつ 王 雪	地球社会 統合科学 専 攻	中国環境領域における非政府組織に関する研究 —中国草の根NGOを着目して—	2018年 3月20日
地球社会修 第 131 号	理 学	おお つか けい すぐ 大 塚 佳 亮	地球社会 統合科学 専 攻	原子間力顕微鏡によるカルサイトの溶解・結晶 成長ナノスケール解析	2018年 3月20日
地球社会修 第 132 号	学 術	か 何 けつ 何 潔	地球社会 統合科学 専 攻	中国語を母語とする日本語学習者の言いさし表 現「けど」の使用実態についての—考察 —日本語母語話者との対照研究—	2018年 3月20日
地球社会修 第 133 号	学 術	かた づく りょう へい 堅 次 亮 平	地球社会 統合科学 専 攻	原子力発電所建設計画自治体における 「まちづくり」の可能性 —山口県上関町を事例に—	2018年 3月20日
地球社会修 第 134 号	学 術	かん し せい 関 詩 蕊	地球社会 統合科学 専 攻	ヘルダーの『民謡集』に関する研究 —周作人への影響を中心に	2018年 3月20日
地球社会修 第 135 号	学 術	キム テ ヨン 金 兌 妍	地球社会 統合科学 専 攻	スピーチレベルの切り替えに関する日韓対照研究 —大学生初対面場面の会話をもとに—	2018年 3月20日
地球社会修 第 136 号	学 術	こ ふう か 呉 宇 霞	地球社会 統合科学 専 攻	河野多恵子文学の表現方法 —マゾヒスト視点による考察	2018年 3月20日
地球社会修 第 137 号	学 術	こ けい へん 呉 暁 敏	地球社会 統合科学 専 攻	戦前の九州における小水力発電事業の発展と その地域的な意義 —南那珂郡十六ヶ町村組合を事例として	2018年 3月20日

○○○ 大学院データブック

地球社会修 第 138 号	理 学	ヨ 呉	ショ 書	ツ 通	地球社会 統合科学 専 攻	中国・海南島五指山自然保護区の運営が地域住 民の生計に与えた影響	2018年 3月20日	
地球社会修 第 139 号	学 術	ヨ 江		ヒ 薇	地球社会 統合科学 専 攻	中国における大卒者の就職移動に関する研究 —湖北省武漢市から珠江デルタ地域への移動者 を事例として—	2018年 3月20日	
地球社会修 第 140 号	学 術	ヨ 黄	ヨ 耀	シ 萱	地球社会 統合科学 専 攻	宮崎駿のアニメ作品における女性キャラクター について	2018年 3月20日	
地球社会修 第 141 号	理 学	こ 駒	が 形	し 森	地球社会 統合科学 専 攻	Review of host-parasitoid relationships on <i>Gymnosoma rotundatum</i> (L., 1758) (Diptera, Tachinidae) .	2018年 3月20日	
地球社会修 第 142 号	学 術	コルドバ アロジョ エステバン			地球社会 統合科学 専 攻	The Construction of the Collective Memory of War in Japanese Television: A New Concept of Self-Censorship vis- à-vis the Issues of Underrepresentation detected in the case studies in 2007, 2008 and 2017	2018年 3月20日	
地球社会修 第 143 号	学 術	サイ 蔡	ゲイ 芸	メイ 明	地球社会 統合科学 専 攻	日本語割り込み発話に見られるジェンダー表現 について	2018年 3月20日	
地球社会修 第 144 号	理 学	ま 坂	も 本	だい 大	ち 地	地球社会 統合科学 専 攻	島嶼状に分布する鳥類における集団遺伝構造	2018年 3月20日
地球社会修 第 145 号	理 学	ま 相	ら 良	も 一	き 輝	地球社会 統合科学 専 攻	Taxonomic study of the genus <i>Coenosia</i> of Japan (Diptera: Muscidae)	2018年 3月20日
地球社会修 第 146 号	学 術	シュ 周	リョ 凌	カン 瀚	地球社会 統合科学 専 攻	改革開放初期の中国における自然観光資源の 保全と観光化の経緯に関する研究 —桂林を中心に—	2018年 3月20日	
地球社会修 第 147 号	学 術	ジョ 徐	シ 詩	キ 琪	地球社会 統合科学 専 攻	戦後派作家の上海体験 —武田泰淳と堀田善衛を中心に	2018年 3月20日	
地球社会修 第 148 号	学 術	じょう 城	ぎ 崎	ゆ 由	き 紀子	地球社会 統合科学 専 攻	日本人 EFL 学習者のオーラル・コミュニケー ション・ストラテジー使用実態と意識	2018年 3月20日
地球社会修 第 149 号	学 術	しょう 庄	や 山	ゆ 友	り 理	地球社会 統合科学 専 攻	ハンナ・アーレントにおける精神の営みと 公的領域の接続について —彼女の言語観を手掛かりに—	2018年 3月20日
地球社会修 第 150 号	学 術	セリス サンチェス ミゲル アロンソ			地球社会 統合科学 専 攻	Meiji Ethics textbooks and their role in the formation of the family - state system (1880-1903)	2018年 3月20日	
地球社会修 第 151 号	学 術	ソ 宋		タン 丹	地球社会 統合科学 専 攻	依頼・断りを含む言語行動に関する日中対照研究	2018年 3月20日	
地球社会修 第 152 号	学 術	た 高	く 久	あ 彩	地球社会 統合科学 専 攻	明治政府の「復古」と「博物館」の成立 —1882年(明治15年)に博物館が上野公園に 開館するまで—	2018年 3月20日	

地球社会修 第 153 号	学 術	た ぶち あや 田 淵 綾	地球社会 統合科学 専 攻	日本におけるバイオエシックスの形成と課題 —歴史の学際的捉え直しを通して—	2018年 3月20日
地球社会修 第 154 号	学 術	チョウ シュン キョウ 張 俊 卿	地球社会 統合科学 専 攻	The relationship between the Chinese Kuomintang government and the Thai politician Pridi Banomyong: An analysis of the reasons the Kuomintang abandoned Pridi after 1947	2018年 3月20日
地球社会修 第 155 号	学 術	チョウ セイ 張 茜	地球社会 統合科学 専 攻	中国における風力発電の発展のシナリオ	2018年 3月20日
地球社会修 第 156 号	学 術	チョウ バク フウ 張 漠 風	地球社会 統合科学 専 攻	中国共産党下の儒教復興 —大陸新儒家と政府系学者の関係性を中心に	2018年 3月20日
地球社会修 第 157 号	学 術	チョウ ヨウ タン 張 耀 丹	地球社会 統合科学 専 攻	東京都市圏における中国人居住者の住宅購入 パターンと動機・選好過程	2018年 3月20日
地球社会修 第 158 号	学 術	チン シン エイ 陳 璿 琰	地球社会 統合科学 専 攻	The Communication Strategies of Japanese English Learners in Academic Debate	2018年 3月20日
地球社会修 第 159 号	学 術	チン スイ 陳 帥	地球社会 統合科学 専 攻	「生活者としての外国人」のための地域日本語 教育に関する研究—ゼロ初級者に向けた学習 プログラム開発の一提案—	2018年 3月20日
地球社会修 第 160 号	学 術	チン ユ 陳 瑜	地球社会 統合科学 専 攻	中国江蘇省南部地域におけるアパレル産業発展 に関する研究—地方政府の政策と企業家の経営 判断に注目して—	2018年 3月20日
地球社会修 第 161 号	学 術	ライ カ キ 程 佳 琦	地球社会 統合科学 専 攻	談話標識としての「なんか」の機能 —対応する中国語表現に注目して—	2018年 3月20日
地球社会修 第 162 号	理 学	ど い きよ かず 土 肥 聖 知	地球社会 統合科学 専 攻	北部九州のヒラタクワガタの集団遺伝学的解析	2018年 3月20日
地球社会修 第 163 号	学 術	ドウ フウ ウ 童 沸 宇	地球社会 統合科学 専 攻	吉野作造の選挙制度論の再検討	2018年 3月20日
地球社会修 第 164 号	理 学	の がみ りょう 野 上 凌	地球社会 統合科学 専 攻	Genetic population structure and phylogeographical patterns of two horseshoe crabs (<i>Tachypleus gigas</i> and <i>Carcinoscorpius rotundicauda</i>) in Southeast Asia	2018年 3月20日
地球社会修 第 165 号	学 術	バ マ シ 志 カ 馬 志 霞	地球社会 統合科学 専 攻	林芙美子の戦後作品における「戦争未亡人」に ついて	2018年 3月20日
地球社会修 第 166 号	学 術	ハン カ イン 潘 夏 韻	地球社会 統合科学 専 攻	在日中国人留学生の異文化適応における視聴覚 メディアの影響	2018年 3月20日
地球社会修 第 167 号	学 術	ハン フン ザイ 潘 文 財	地球社会 統合科学 専 攻	中国における太宰文学の受容	2018年 3月20日

○○○ 大学院データブック

地球社会修 第 168 号	学 術	フ 傳 カ 嘉 オク 憶	地球社会 統合科学 専 攻	Maneuvering in the Limited Space: An Inquiry into Local NGOs of Iraqi Kurdistan	2018年 3月20日
地球社会修 第 169 号	理 学	フィルマン シャー ムラッシュ ハダ	地球社会 統合科学 専 攻	Depositional and diagenetic processes of Oligo-Miocene carbonate rocks in the Northeast Java Basin, Indonesia: Response to global and regional environmental changes	2018年 3月20日
地球社会修 第 170 号	理 学	ほし 星 の 野 こうのすけ 光之介	地球社会 統合科学 専 攻	Studies on molecular phylogeny, morphology and phylogeography of Aegus laevicollis (Coleoptera: Lucanidae) and its related species in Japan and its neighboring area. (日本列島および周辺地域 におけるネプトクワガタ Aegus laevicollis (Coleoptera: Lucanidae) と近縁種の分子系 統と形態形質の再検討、ならびに系統地理に関 する研究)	2018年 3月20日
地球社会修 第 171 号	学 術	まえ 前 だ 田 さくら 桜 こ 子	地球社会 統合科学 専 攻	宮沢賢治における「透明さ」の詩学 —ガストン・ バシュールにおける物質的想像力を手掛かり に—	2018年 3月20日
地球社会修 第 172 号	学 術	マルチンス ラファエル ビニシウス	地球社会 統合科学 専 攻	攪乱するライトノベル—桜庭一樹『GOSICK』 におけるジャンル・ジェンダー—	2018年 3月20日
地球社会修 第 173 号	学 術	やま 山 ぐち 口 ゆ 祐 か 香	地球社会 統合科学 専 攻	歴史実践としての朝鮮通信使関連文化事業 —韓国側の取り組みを中心に—	2018年 3月20日
地球社会修 第 174 号	学 術	リ 李 イ 禕 セン 璇	地球社会 統合科学 専 攻	近代日本語における二人称代名詞についての考 察—歴史的変遷を中心に—	2018年 3月20日
地球社会修 第 175 号	学 術	リョウ 廖 イ 韋 ナ 娜	地球社会 統合科学 専 攻	太宰治『人間失格』の現代における受容 —コ ミックを中心に—	2018年 3月20日
地球社会修 第 176 号	理 学	レー ディン タオ	地球社会 統合科学 専 攻	Study on the genetic characteristics and pathological reaction of Phomopsis species in wild asparagus (<i>Asparagus kiusianus</i>)	2018年 3月20日
地球社会修 第 177 号	学 術	呂 呂 ヨウ 楊	地球社会 統合科学 専 攻	中国人学習者の日本語複合動詞「～あげる」の 習得に関する一考察	2018年 3月20日
地球社会修 第 178 号	理 学	わう 王 シ 梓	地球社会 統合科学 専 攻	中国産ヒラタクワガタの分子系統および比較形 態解析	2018年 9月25日
地球社会修 第 179 号	学 術	ジェームス ロフタス James Frances LOFTUS	地球社会 統合科学 専 攻	Itazuke Style Globular Earthenware: A Micro-Regional Case Study of Yayoi Pottery Trends in Northern Kyushu	2018年 9月25日
地球社会修 第 180 号	理 学	セルゲレン ウンドラー Sergelen Undraa	地球社会 統合科学 専 攻	Geochronology of assumed cratonal terranes in Mongolia	2018年 9月25日

地球社会修 第 181 号	学 術	なか がわ ゆう 侑 中 川 侑	地球社会 統合科学 専 攻	近代日本における朝鮮からの「留学」 —「留学生」とその「監督」を巡って	2018年 9月25日
地球社会修 第 182 号	理 学	バットグトヒ タミル Battogtokh Tamir	地球社会 統合科学 専 攻	REE mineralization in alkaline plutonic rocks from north-west Mongolia	2018年 9月25日
地球社会修 第 183 号	理 学	ボルド ムンフデルゲル Bold Munkhdelger	地球社会 統合科学 専 攻	A Bioarchaeological approach to nutrition and diet in Yayoi populations. Analysis of stress markers and oral health indicators in human skeletal remains from northern Kyushu and western Yamaguchi prefecture	2018年 9月25日
地球社会修 第 184 号	学 術	ラハマン Rachman ムハンマド アウリア Muhammad Aulia	地球社会 統合科学 専 攻	Between sovereignty and coreligionist solidarity: The Organisation of Islamic Cooperation and Muslim minority issues in Southeast Asian non-member states	2018年 9月25日

博士学位(課程博士)取得者及び論文題目一覧(大学院地球社会統合科学府)

授与番号	学位の種類	氏 名	専 攻	博 士 論 文 名	授与年月日
地球社会 博 甲 第 6 号	学 術	タン アイ ティ 婷 单 艾 婷	地球社会 統合科学 専 攻	論説文におけるテキスト構造の日中対照研究 —新聞社説を分析資料として—	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 7 号	学 術	はや 瀬 いく こ 子 早 瀬 郁 子	地球社会 統合科学 専 攻	来日前不安に関する理論的・実証的研究 —eラーニングによる来日前日本語学習教材 の有効性—	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 8 号	理 学	きた の っ べい 平 北 野 一 平	地球社会 統合科学 専 攻	Petrology of high-temperature metamorphic rocks in the Highland and Wanni Complexes, Sri Lanka (スリランカ・ハイランド岩体およびワンニ岩 体に分布する高温変成岩の岩石学的研究)	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 9 号	学 術	コ 呉 キョウ リョウ 良 呉 暁 良	地球社会 統合科学 専 攻	在日中国人留学生のソーシャル・ネットワーク とその関連要因 —グローバル・キャンパスの 構築に向けて—	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 10 号	学 術	なか だて ゆう き 紀 中 立 悠 紀	地球社会 統合科学 専 攻	戦後日本における戦犯「復権」 —戦犯釈放運動から戦犯靖国神社祀へ—	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 11 号	学 術	ひがし で とも 朋 東 出 朋	地球社会 統合科学 専 攻	日本語の呼びかけ語の語用論的機能とポライト ネス —日露対照研究を通して—	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 12 号	学 術	やな せ ち え み 美 柳 瀬 千 恵 美	地球社会 統合科学 専 攻	漢字圏における継承日本語教育に関する研究 —年少者の漢字習得の観点から—	2018年 3月20日
地球社会 博 甲 第 13 号	理 学	グエン ワン ティン Nguyen Van Thinh	地球社会 統合科学 専 攻	Degradation of Agricultural Soils in a Coastal Zone of the Red River Delta, Northern Vietnam (北部ベトナム紅河デルタ の海岸地帯における農地土壌の劣化)	2018年 3月20日

○ ○ ○ 大学院データブック

地球社会博 甲 第14号	理 学	ブラッシュ ミクラビッチ Blaž Miklavič	地球社会 統合科学 専 攻	The occurrence of phreatic overgrowth over speleothems (POS) and their use as Holocene paleo sea-level indicators on Minami Daito Island, West Pacific (西太平洋南大東島における飽和帯重複成長鍾乳石の発達とそれらの完新世古海水準指標としての利用に関する研究)	2018年 3月31日
地球社会博 甲 第15号	学 術	ショーン ハドソン Seán Hudson	地球社会 統合科学 専 攻	J-Horror and Ghibli: Ideology in Japan's Two Global Cinemas (J ホラーとジブリ：日本の二つのグローバル・シネマにおけるイデオロギー)	2018年 9月25日
地球社会博 甲 第16号	理 学	きた はら ゆう 北 原 優	地球社会 統合科学 専 攻	Reconstruction of full-vector archaeomagnetic reference curve in East Asia from 200 CE to 1100 CE (東アジアにおける西暦 200 年から 1100 年の 3 次元考古地磁気永年変化曲線の復元)	2018年 9月25日
地球社会博 甲 第17号	学 術	チェン リカ 陳 力	地球社会 統合科学 専 攻	テレビ番組のインタビュー・トークにおける発話デザインの相互行為的分析	2018年 9月30日

博士学位（課程博士）取得者及び論文題目一覧（大学院比較社会文化学府）

授与番号	学位の種類	氏 名	専 攻	博 士 論 文 名	授与年月日
比文博甲 第283号	比較社会 文 化	ヌルガリエヴァ リヤイリヤ Nurgaliyeva Lyailya	国際社会 文 化	Kazakhstan's Multi-Vector Diplomacy: The Making and Development of the Soft Balancing Policy of Kazakhstan vis-à-vis Russia (カザフスタンのマルチ・ベクトル外交：カザフスタンによる対ロシア・ソフトバランシング政策の形成と展開)	2017年 11月30日
比文博甲 第284号	比較社会 文 化	ハン 超 潘 超	国際社会 文 化	『夷堅志』編纂と諸版本の研究	2018年 3月20日
比文博甲 第285号	比較社会 文 化	い で まい こ 井 手 麻衣子	日本社会 文 化	中近世移行期の公家社会と武家権力—身分編成の視点から—	2018年 3月31日
比文博甲 第286号	比較社会 文 化	にし お のり こ 西 尾 典 子	日本社会 文 化	近代日本における事故防止技術の蓄積と経済発展—北部九州の石炭鉱業を中心として—	2018年 6月30日

博士学位（論文博士）取得者及び論文題目一覧（大学院地球社会統合科学府）

授与番号	学位の種類	氏 名	博 士 論 文 名	授与年月日
地球社会博 乙 第1号	学 術	こ ばやし たか よし 小 林 孝 吉	滝沢克己・椎名麟三・内村鑑三におけるキリスト教受容の文学的研究——「インマヌエル」「復活」「再臨」を中心とした批評的考察	2018年 8月31日

博士学位（論文博士）取得者及び論文題目一覧（大学院比較社会文化学府）

授与番号	学位の種類	氏 名	博 士 論 文 名	授与年月日
比文博乙 第48号	比較社会 文 化	たに さわ あ 里 谷 澤 亜 里	玉類からみた古墳時代開始過程の研究—弥生時代後期から古墳時代前期の西日本を中心に—	2018年 3月20日

編集後記

『Crossover』44号をお届けいたします。今号も、多くの方々の玉稿を得て、充実した内容となっております。編集にあたりまして、ご協力くださった、執筆者、関係者の皆さまには、茲に衷心より感謝の微衷を表したく存じます。

広報・情報化推進委員会 クロスオーバー編集担当 : 辻野 裕紀

ISGSのロゴの説明



新学府開設にともない、「地球社会」に関するゆるやかに繋がる研究領域を6つのコース、「包括的地球科学」「包括的生物環境科学」「国際協調・安全構築」「社会的多様性共存」「言語・メディア・コミュニケーション」「包括的東アジア・日本研究」に編成しました。このロゴの三角形は、この6つの研究領域を象徴しており、それらが融合しつつ未来へと前進するようすを表しています。ロゴのカラーは、本学府の前身である比較社会文化学府のイメージカラーを引き継いだものです。



ISGS

GRADUATE SCHOOL OF
Integrated Sciences for Global Society

発行者 九州大学大学院地球社会統合科学府
発行年月 2019年3月

〒819-0395 福岡市西区元岡744
TEL : 092 (802) 5786・5787
FAX : 092 (802) 5791

ホームページ : <http://isgs.kyushu-u.ac.jp/>